

4758

224
7
237

川上峨山著

戀愛の文豪

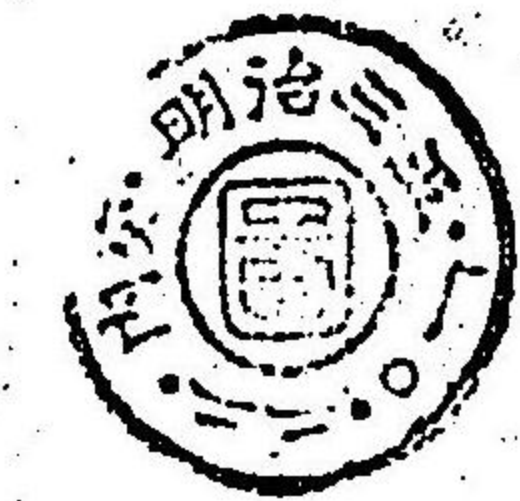
文學同志會藏版

戀愛の文豪

目次

獨逸文豪

戀のゲータ



頁數

砲聲中の結婚

多血詩人

女性の感化

萌出し戀の若草

婦人社會に於けるゲータ

一、再び燃ゆる戀の熱情、第二の戀人

二、ゲータの艶福姉妹の戀争ひ

三、意外の處で第三の戀人と會見

四、戀の餘情、他所の花を慕ふ

五、第四の戀人と第五の戀人

六、第六の戀人、惜しき別れ

七、第七の戀人、十年間の密通

墮落時代のゲータ

一、第八の戀人と私生兒

二四

二三

二一

一九

一八

一六

一三

一〇

七

七

四

一

二妻以外の戀人……………二五

晩年の悲劇……………二六
母の死昔の戀人夫人の死……………

老後の戀……………二八
獨逸のふ半長右衛門……………

ゲーテの末路と其最後……………二九
一、榮譽の勳章……………二九
二、ゲーテの終焉……………三〇

英國詩人 戀のバイロン

多情多感……………三三
英國の業平……………

家庭と幼時……………三四
天賦の美想……………

幼なき戀……………三七
戀人の墓……………

悲惨の失戀……………四〇

一、戀人とは敵同志……………四〇

二、戀愛と友愛……………四四

東歐漫遊中の戀……………四七
アゼンの少女……………

戀の一年有半……………五〇
彼の結婚……………

一、理想の妻と戀人……………五一

二、戀の樂は一年有半……………五一

四、熱情は戀人に集まる……………五四

四、奇兆と意外……………五五

バイロン夫人……………五七
思想と行爲……………

落莫の離婚……………六一
一、愁悲の家庭……………

二、多情の夫と眞面目の妻……………六四

三、妻の家出と愛見……………六八

四、神聖の離別……………六九

伊太利に於ける戀……………七〇
一、戀人クララ……………

二、戀の一變……………七一

三、戀の再變……………七三

四、戀の三遷……………七四

最後の戀とその末路……………七六

一、愛は軽く義は重し……………七八

二、義軍の陣中に永眠す……………七八

獨逸文豪 戀のシルレル

幼時の思想……………八三

少年詩人……………八三

戀愛の戀人……………八六

理想の戀……………八六

最初の愛と其失戀……………八九

其謠ひし歌……………八九

漂泊時代の戀……………九三

一、シルレルの出奔……………九四

二、冷かなる戀……………九七

戀の變遷……………一〇〇

一、再度の戀と破戀……………一〇一

二、第三の戀も破れたり……………一〇二

三、第四の戀人……………一〇六

四、彼が風貌と容姿……………一〇八

五、第四の戀も亦破れぬ……………一〇九

六、第五の戀人……………一一〇

戀の成功……………一一六

シルレルの結婚……………一一六

家庭のシルレル……………一二〇

シルレルの終焉……………一二三

英國文豪 戀のデヨンソン

不徳の十八世紀……………一二五

一、當時に於ける社會の習俗……………一二六

二、當時に於ける世人の愛情……………一二七

三、當時に於ける男子の戀情……………一二八

四、當時に於ける女子の戀情……………一三一

天真のジョンソン……………一三四

一、幼時の彼と父母の戀……………一三四

二、少壯氣鋭の文士時代……………一三九

始めての戀……………一四一

可憐の胸裡……………一四四

再度の戀……………一四四

さても奇縁なる……………一四七

奇縁の眞想……………一四七

一、戀の成就……………一四七

二、彼の結婚……………一四八

戀の戯曲……………一四九

アイリッシュ……………一五一

婦入に對しての彼……………一五一

多情?多血?……………一五三

果敢なきは戀……………一五三

愛妻の逝去……………一五四

ジョンソンの終焉……………一五四

英國詩人 戀のシエレー

一、また起ルヤ……………一五五

二、臨終の詠詩……………一五五

その美貌……………一五九

戀の媒介……………一六一

その多感……………一六一

不幸の基……………一六三

彼の性行……………一六三

一、祖先と少時……………一六五

二、自尊時代……………一六五

壯時の激情……………一六六

一、少年化學者……………一六六

二、ポケット中の固パン……………一六七

無神論者……………一六九

一、英國の兆民居士……………一六九

二、放校と勘當……………一七〇

彼の失戀……………一七二
 その基は戀人が他人と結婚……………一七二
 義侠の戀……………一七四
 一、一擲同情の愛……………一七四
 二、愛を以て生活せん……………一七七
 出奔と結婚……………一七八
 戀人と手を取り交す異脚の空……………一七九
 家庭のシエレ……………一七九
 一、調和と不調和……………一七九
 二、新なる戀は燃えぬ……………一八二
 妻子を置いて戀人と走る……………一八四
 戀の變遷慘また慘……………一八六
 妻の自殺……………一八六
 悲惨其極に達す……………一八七
 戀の一幅對……………一八七
 一、シエレとバイロン……………一八八
 二、バイロンと相知る……………一八九
 三、共に相似たり……………一九〇

四、兩者の比較……………一九〇
 彼の終焉……………一九一
 伊水奇才を溺らす……………一九一

戀愛の文豪 目次終

戀愛の文豪

獨逸文豪

戀のグーテ

砲聲中の結婚

多血詩人

川上峨山 著

時は西曆一千八百〇六年の秋、四方の山々は龍田の姫の織り出した處の錦の衣を着初めた、十月十四日の朝まだきであつたが、獨國ウワイマルの本營から吹起る喇叭の響は、静かなる市民の夢を破つて、敵軍の來襲をば急報した、すると忽ち數十隊の軍兵は、境を犯して薄つて來、守衛の塞はやがて重圍の裡に陥つて、市内は今や戦亂の街とは變らうとし、此の不意の襲撃と共に殷々たる砲聲はウワイマルの南の方に方つて轟るき渡つた、是れ實に享佛の兵がイエナに戦つた時である。

呐喊猛進、死を願いて血戦する。李魯西亞軍の銃鎗は、園籬の上に閃いて、そして又此所を瞰下して佛の軍は銃隊を配つた、程もあらず兩軍の陣中から起る砲火の中に、街上の光景は慘凄として、正に是れ殺風天地に満ちたるがようで、此恐ろしい間に佛の輕騎兵は、敵を偵つて市内に驅逐した、飛彈は憂々として市民が頭上に鳴り降り、町家は多く兵燹に罹つて、焔の裡に包まれたが、かかる修羅の活劇も少時にして休まり、再び見る澄空日は高く、乾坤甚だ寂寞て時に唯だ驚鳥の梢に叫ぶのがあるのみであつた。

然も此佛軍が不意なる襲撃の砲聲が、未だ治まらないその月十九日に於て、獨逸希世の大詩人が結婚式は、恙がなくも舉られた、此詩人はその戀人と共に暮したこと十有八年、その忠實なる愛を容れて、茲に結婚することとはなつたのである、然して此詩人とは誰であつたらうか、戀人とは誰であつたらうか、是れ即ち近世絶比の英傑、第一世ナポレオン皇帝と共に、當時世界の二代表者として、長くその偉名を歴史に留めた、獨逸の大詩人ヨハン、ウナルフガン、ゲー

テ其人と、彼が戀人クリスチアチとの兩人であつたのである。

抑も彼はその文才と眞價とに於て全く地上の人だが、彼は又世界の兒であつたのである、換言すれば彼は近世的生活の化身であつて、又その意向の代表者であつた、然も英の文豪カーライルをして、彼れ自身の進歩と精神的發達とは、是又彼が國民の進歩に外ならない」と言はしめたのは、以て彼が人物の如何を窺ふに足るし、其那翁とエルフナルトの大會議の席に接見して、彼が才識克く那翁を服させたなんぞに至つては、又以てその偉見の如何に卓絶であつたるかを知るに價するであらふ、彼は斯くの如く、嘗に日耳曼國民の誇稱と賞讃とを、その兩肩に負ふやうな詩人中の大詩人であつた計りでなく、近世歐羅巴人種の歴史中に於て、最も秀逸なる詩の賜を遺した、六詩仙の一人たる計りでなく、あらゆる時代とあらゆる人民との最大文豪として、當に推すべきの大偉人であるのだ。

されど彼は如斯偉名を爲したと共に、又戀に就ては、幾多の艶聞をば世に流し

たのである、彼のクリスチアナを愛し、そして彼女と結婚した以前に於て、或はその老後に於て、最も著しき戀の變遷と、愛の活滅とをば見たのである、否な自ら味ふたのである、一度椽大の筆を揮ふては、空前絶後の才名を博した大文豪も、あはれや戀の煩惱の奴となつては、江東の紙價を騰からせるやうな健筆も、笑止や戀のレツターを認むるに苦んだのである、さてもゲーテが戀の活劇如何であつたか、彼は希世の大文豪であつたと共に、併せて非常なる多血兒であつたのである。

女性の感化

萌出でし戀の若草

さても此大豪哲をして、早くも戀の焰を燃え出ださしめたは何かといふに、是れは即ちフレウライン、フワン、クレテンベルグ女が感化であつた、彼は實に十四才の時に於て、彼女と相知つたのである、此婦人こそ、彼が「ウ・井ルヘルム・マイステル」中の「美人の懺悔」に於て代表せられた、温雅優美の一處女であつ

た、然も彼はその大なる感化を蒙て、宗教に關する短歌を作り、开を見事に認めて、父の下に呈した時は、如何に大なる喜悅と賞辭とを賜はつたと思ふ乎、今や彼が心には戀の若草は春を迎へて萌出し、斯の女性の異つた感化力は、既に彼に及ぼしたのである。

嗚呼、天真爛漫であつた彼をしてからに、學を修め徳を研ぎ、天晴世に芳しき名を擧げやうものと心懸けた幼な心を、唯だ人は男山の榮え行く世の盛に、面白い事の仕たい三昧、ほしきまゝに世を暮すが本望と、戀の夢路に迷ひ狂はして、譽を得るも、謗を得るも、畢竟僅五十年の短い命、死んでの後は更に知る處ではなし、況てや譽むる人、謗する者、皆等しく逝いて苔のむす墓の下に葬られるものを、唯だ願はしきは世に在る間の樂みだけ、いざや是から道德沙汰はさらりと捨て、縦び初めし春の間に、色の巻に分け入つて、思ふ女の懷に眠り、薫しき白ばらの匂ひに魂をわななかせ、命を戀にささげやうづと、思ひ出さしたは彼が十四の時、ふる雪を獨寢の床に悲みし或る夜の事であつた。

かく思ひを更めた彼は、夜明けて後、朝の風を痛みて學校へも行くが物憂く、窓を押開いて面を眺むれば、鶯色の髪房々としてリボン華美なる令嬢が、優しき姿や、または向ひ側を通る少女が、思はせ振りの蝙蝠傘の深きが癢に觸り、若き夫婦の互に手を握り合ふて行き交ふなど、等しく彼が胸に異様の感を浮べさせて、悉く心の駒を狂はせる戀の媒介とならぬはなかつた。

此に於てか血氣に逸やる彼は、何時しかグレンツチエンと呼ばれたる年長の處女をば夢み始めた、此時彼は未だ三五の少年であつたのである、されば彼女も彼を遇するに初心なる一小兒を以てしたが故に、哀れや彼が戀の眞情は汲み分けられずして了つた、此に於て彼は开を憤恨して、遂に彼の女と交際を絶つた、されど彼は「最初の失戀の悲哀」を棄て難かつたのである、此夢の様なる憂鬱は屢屢彼を索居に追ふた、そして彼はその餘情を慰めやうとして、自然の美を愛したのである、然し乍ら性來多血のゲーテは、何時迄も長く斯ふしては居られない、彼は再び戀の焰を高めて或る方面にこそは試みたのである、これぞ

彼が生涯を彩る顔料で、即ち眞白なる清き素絹は戀の色香に染められて、彼は婦人の社會へと轉落した、時に千七百六十五年、彼のライプシツヒ大學に居た十六才の時であつた。

婦人社會に於けるゲーテ

一、再び焰ゆる戀の熱情、第二の戀人

色は匂ひ花は盛ても、一度風吹けば散りて了ふものを、我が世誰か常のあらうぞ、朝に紅顔に誇つた美少年も、夕に白骨と變るを思ふたならば、富貴功名又何にかせんだ、されば六尺の五躰、死んでの後は野へ棄てられて、瘦せ犬の腹を肥すも、又は河流へ打ち込まれて、水潜る魚の餌食とならうとも、我に於ては更に心に懸る處でない、儘よ戀に命をささげた身の、鹿爪らしき教師の講義を聞かうより、婦人社會に飛び込んで、思ふ存分の事をば仕盡さうと、フナルドの田舎育ちの彼は、ライプシツヒの客舎に、悖禮失躰の舉動をした事

は屢々であつた。さらぬだに大學の教科はそつち退けの彼は、フラス、ペー、夫人より交際上の秘訣たる骨戯の遊びを學んだ、彼は此夫人によりて費なく今迄の田舎風を改め得たる計りでなく、彼の田舎に於て自貢した詩の、最も哀むべきものであつて、自ら情人によりて得たる處より少ないといふ事迄も悟つた。

五月雨の時間をまつ月は清く、露より露を照しても、心の闇の影暗くて、晴る時のない迷の中に彷徨ふた彼は、友の一群と共にプリユールの酒樓に相會した、何れ劣らぬ氣鋭の一組、酒が取持つ雑談は、遂に等しく戀の月旦、落ち着く先は九州路ならぬ戀の噂とりど、色は人目の關を忍び合ふて、互に首尾する夜こそ樂みである、待つに來ぬ人のじれつたさ、思はぬ邪魔に時遅くれて、さぞや戀人が怨んで居やうかと、思ひ遺る胸の苦しみさ、待つ身より待たるる身になるなどは、はて此時を言ふらめと、遇はぬ其夜の恨みをば、逢ひしその夜の明やすく、後朝の別を悲しんで、後見送るが趣味のある所と、其家の主婦

が彼と同じ故郷の人であつたを幸に、早くも取り入つて親昵し、忽ちその家族の一人となりて、思ふ娘のアナ、カタリナと相戀ふた。

此少女こそ、彼が自叙傳の中なる「アンシエン、アンチテ」と言へる少女である、彼女は花の盛りの十九歳で、すらりとして快活なる嬌態は、正に彼を戀の奴とするに充分なる魔力を保つて居つた、然も又彼女が眼に映れる美少年が輝ける姿は、恰も彼が彼女に満身の愛を捧げしが如く、彼女は彼にその心を奪はれて、二人は戀に酔へるの人とはなつた、彼等は日毎に於て相見へ、啻に言葉に於て愛を交へたる計りではなく、ゲーテとカタリナとは私劇の舞台に於て、情人同志にさへ扮したる事迄あつた。

されど血氣にはやつた彼は、疑察を以てその戀人をば苦めた、彼はつまらん嫉妬の情を起し、道理もないのに怒りなどした、さればカタリナも彼が薄情を忍び能はなくなつた、彼女の愛は熱涙と共に洗ひ滌はれたのである、彼は开を見て失望した、然し乍ら彼は辛くも一の良策を考へ出した、彼は詩を以て彼女の

心を慰めやうとしたのである、彼は「ヂー、ラウチ、デス、ウエルリーフンテン、(情人怨)」の短歌を作つた、そして之より益々戀の闇路に深入しやうとしたのである、憐むべき青年は、益々清き社會より遠ざからうとはしたのである、然も彼は曾てグレッツチエンと相慕つてより、早くも社會は一葉の殻皮に包まれたるもので、その裡面には幾多の醜淵が、横はれて居るものであると云ふ事實を發見したのであつた。

二、ゲーテの艶福

美しきゲーテを慕ふて互に姉妹が戀争ひ

此に於てか彼は暴飲し始めた、然も未來の大詩人であるゲーテは、此時代にあつて正に品行を破つたのである、さればアポロの神によう似て居ると稱せられた彼は、青春二十一にしてストラスポルクに來つた、而して彼がホテル、ツーム、ガイストに投宿して、その食堂に這入るや、満室の衆客の眼は、皆此美少年に向つて注がれた、彼が容貌は魁偉であつて悠然迫らず、その額は高くして

廣く、その驚嘴の如く圓曲してをる隆き鼻は正しく刻まれ、その褐色の眼は清美にして炯々として威を有ち、その口は盈滿にして上唇は鋭敏深情の表彰となり、其風丰は堂々として何人の眼をも惹き易かつたのである、然も此時に當つてストラスポルクの交際社會は、彼をして益々柔弱の奢風に導いた、彼は此交際場裡に出入するに従つて、美はしき鬢髪を袋中に結び上げ、毎時香水を匂はして、おかしき辮髪をさへ加へたのである、之れ誰れが爲めに容づくるのであるか、青春酣はなる彼は、正に其愛を得べきの少女に向つて、悉く憂き身を呈したのであつた、そして當時舞蹈し能はない美少年は、ストラスポルクの怪事であつて、日曜日の夜に於ては、必ず此輩の園遊會が無いことは稀であつた、此處に出入したゲーテは、何時しかその風に染まつて舞蹈を學ぶこととはなつた。

その舞蹈の師匠は佛國人であつて、師匠の娘の二少女は、實にゲーテの對手となつて稽古の席に侍したのである、此窈窕歩々蓮をなす姉妹は、共に二十歳を

越えない妙齡の少女であつて、其快活と嬌艶とは方に少年詩人の魂を奪ふて其心を動かした、然も亦彼女たちに於ては共にゲーテの美貌に惚然たる計りであつた、姉慕ひ、妹戀ひ、彼は艶福の間に此何れを執るべきかに躊躇した、櫻の如き姉のルーシングが容色も棄つべきに非ず、桃の如き妹エミリナが嬌態も亦放ち難かつたのである、されど彼が心は遂に妹エミリナに歸した、此に於てか姉妹の間に嫉妬の情は挾まれた、ルーシングはエミリナを嫉んだので、可憐なるエミリナはゲーテに我家より遠ざからんとを請ふた、ゲーテは當感し、ルーシングは憤恨した、そしてその情は溢れ、ゲーテを捉へて髪を纖手に握つて痴態を演じた、怒氣満面なるルーシングは眞赤なるその顔をば、途方に暮れるるゲーテの蒼顔に押し當て、啜吻をして叫んだ。

「妾が咒咀は恐ろしいものである、妾の次に此薄情なる男の唇に啜吻する女の子は、屹度長く禍に惱ませられるであらふ………天よ、妾が咒咀を聞召し給へ、そして汝さんは速に出て行て下さいまし。」

と、彼は遂に愛するエミリナを残して此家をば出でた。

三、意外の處で第三の戀人と會見

彼は舞蹈の師匠が娘の戀争ひに思はぬ痴態を演ぜられ、惜しき袂を分ちて彼女の家を出てしより後、或る日その友ウキーランドと共に理想的「荒村牧師」の家を訪ふ事を約束した、牧師はストラスボルグより、相距れて居ること十六哩程である、ドルーセンハイムといへる小さき村に、妻と可憐の少女を伴ふて閑居して居るものであつた、時は千七百七十年の十月、ゲーテは襪を纏ふてみすほらしき神學生のやうに扮装し、友のウキーランドは故らに清楚華美なる風をして、千草亂る、秋の野末を辿つて、馬をドルーセンハイムの客舎に繋ぎ、直に牧師の家に向つた、然も古色蒼然たる家に、牧師フリオオンが彼等を迎へたるの處、愛らしき眼を持てる二八の少女フリードリカを見た時は、さすがゲーテも自ら醜き假裝をしたのを悔んだのである、彼等は家人に導かれて室に入り、談笑の間に時を移したが、少時にして彼は少女の腕に倚りて曠野に行つた、

歩は一步より彼をして天外に遊ぶの思ひあらしめ、戀の感情は握りあへる手より手へと傳つたのである、やがて彼女は清らかなる聲に於て謠ふた、

I come from a forest as dark as the night.

Ard believe me, I love thee, my only delight.

Ei ja, ei, ja, ei, ei, ei, ja, ja, ja!

と、然も此妙なる一節は、遙か彼方なる樹陰と、そしてゲーテの胸とに反響した、彼は此時既に戀の俘とはなつたのである。

夜になるや彼はフリードリカに扶けられて、共に清き月陰の下に逍遙した、情酣なる少年と、少女とが、不言不語の間に於て戀の情は熟したのである。

夜は早くも明けて、曉は霜の中より來つた、彼は起て朝の露置きにし彼女を見るを耻かしく思ふた、そは彼が扮装の醜くかつたのに當惑したのである、されば彼は忽にして妙計を案出し、潜かに驅せてドルーセンハイムの客舎に返り、その子息の服を借りて衣を改め、何程かの菓子を求めて牧師の家に急ぎ歸つ

たが、果てはその一時の詭譎に出でたといふことを悟り、抱腹絶倒したる家族の中に、益々家人と親んだ。されど後一日にして彼はストラスポルクに歸つた、そして彼は此後羅甸の論文を呈出し、博士の學位を貰ふた、時に千七百七十一年八月六日、彼が二十二才の時であつた、そして此日を以て彼が同窓の友は彼が爲めに祝宴を張つた、牧師の娘フリードリカも母と共に彼を訪ふた、されど此時に於ける彼とフリードリカとの價值は、殆んど貴族と平民程の差であつた、新任の博士と、田舎牧師の娘、何人の眼にもその地位の差は知られた、嗚呼、彼がセ、ンハイムの深林に女神の如く信じたるフリードリカは、ストラスポルクの席に於ては、一農婦の娘にも過ぎなかつたのである、斯くも境遇の變遷によつて、その顔色を失ふたる彼女は、憐むべし彼の幻想一操に消え盡したると共に、遂にはその心情に至るまでも、堅く鎖されて入ることが出來ずに終らうとするのを、彼は此不意の變化によつて、フリードリカと絶たざるべからざるに至つた、彼は苦痛を忍んでその愛を捨てざるべからざるに及んだのである。

然も彼が今迄の間にあつて、その眼に映じたる多くの婦人の中に於て、最もよ
り多く彼が心を奪ふたる彼女は、何が故に、彼とその關係を絶たざるべからざ
るに至つたかといふに、世には彼女が徳操を破つた故であるといふものもあ
るが、要するに不釣合の愛より起りたるものに外ならないのである。

四、戀の餘情……他所の花を慕ふ

彼はフリードリカと惜しき袂を分つてより、憂鬱の内に身を投じた、彼は自然
と文學とに依て、少しく其心を慰むることが出来たが、尙不快の念は掃はれな
かつたのである、夜深ふして満月は凄々として廣茫たる氷野を照し、寒風彼の
顔を掃つて肅條たるの時、憂々として遠く響きにし氷滑の靴音は、正に是れ寂
寞を破つて妖靈の叫ぶに似て居る、嗚呼、此深く夢路に鎖されたる彼を顧れば
誰か後年世界に名を博すべき大詩人だらふと思はふや、然も此時代にありて
彼が悲胸を碎いて更に笑顔を以て迎へたるものこそあつた。

そは誰であらふ乎、これ當時獨逸館の主管たるプッフの一女シャーロット、プ
ッフであつた、失戀の餘り憂き月日を過し居るゲータをして、先のフリードリ
カを忘れしむるは、實に斯のシャーロットの外にはなかつたのである、時に彼
女は年十六、花の蕾の愛らしき風情は、幾多の青年をして惱したであらう乎、さ
れど此未開の花を手折るべき人は、既に定められて居つたのである、彼女はハ
ノーフェル公使館の書記官で、ケストテルと呼ばれた年二十四歳の好男子と、許
嫁の中にあること已に二年であつた、ゲータも亦、开を知らなんだではなかつ
たが、然も彼女が快活で淡泊なる氣質と、靜肅にして溫雅なる態度とを見ては、
如何にしても纏綿の情が禁じ能はなかつたのである、されど彼が此戀は成就
されべくもあらなんだ、されば餘情溢れたる彼も、千七百七十二年の秋、九月十
一日の朝七時は、可憐なる少女カタリナに別れてライプシッヒを去りたる當
年のゲータを想ひ出さしむる時であつた、彼は此朝を以て、シャーロットに告
げずしてウェッツラーを去つたのである、戀人の住家を後にして、覺束なくも

ラインの河岸まで辿り來つた彼は、兩岸の光景轉た蕭條として、舊時を追想せしめ、悲懷交々胸に迫つて感慨數刻に涉つた、揚柳岸を掩ふて陰暗きの處、此多血詩人が流るゝ水に對つて無限の悟沈に暮れにし時は、如何に彼が胸裡の苦しくあつたらうか。

五、第四の戀人と第五の戀人

焦思熟慮ラインの堤上を彷徨ひし彼は、扁舟に棹して中流に下り、遂にユブレンツに上陸してラルーシの家に達し、滿腔の親愛を以て歓迎せられた、初め夫人ラルーシの彼と相知るに至つたは、彼女が作の小説をゲーテが某雜誌上に紹介したのによるのである、されど此家に留りし彼が眼は、早くもその女マキシミアチにこそは向つた、此少女が涼しき眼とあどけなき舉動は、明かに此年少詩人が胸に愛の心を印したのである、是れ即ち彼が「ウエルテル」中の「ビー嬢」として紹介せられたる婦人であつた、然も此女がベツチナの未來の母であつた事を思ふたならば、誰しも彼女を見るに、頗る幾多の感が起るであらう、何

となればベツチナはゲーテが老後に於て、彼の被中に擁せられて、艶名を噂せられたる一處女であつた故である、彼は第四の戀人マキシミアチに、愛の心を向けしは實に少時の間であつて、多情なる彼は更に第五の戀人アナ、アントイテテ、ゲロツクに向つてその心を轉じた、時にゲーテ年二十有五才、正に銳氣の壯盛なる時代であつた、此前後に於て彼が健筆は彌々揮はれ、幾多の著作は世に出たのである、彼は乃ち自ら世界の必要なる、人物たることを感じ始めた、そして當時名聲噴々たる有爲の人士は、銳意彼に親近を求め來るやうになつたのである。

六、第六の戀人……惜しき別れ

此時代は彼の最も得意なる盛期であつた、他の滔々者流の小文豪が、鹿瓜らしく騒ぎ居る間に立つて、徐ろに雛鶏の肉を食して默想し、兒戯に等しきを笑ふたは誰であつたか、問はずしてそのゲーテたるを知るであらう、此得意時代に於て彼はフランクフナルトの大銀行家の一女、アナ、エリサベト、シエチマンと

相戀ふた、是れ彼が第六の戀人であつて、彼の女も亦フリードリカ、シャールツテ、アントイテア、マキシミアテと同じ年齢の「十六」であつた、不思議か偶然か、五人が五人とも、等しく十六歳の時に於てゲーテに思はれたとは、然も彼もシエチマンとの間に於ては、已に結婚の式をば、擧げられるが如くに思はれたが、彼女が嚴格なる父が反對によりて、且は彼が親しき友の離間策に於て、茲に兩者の愛は消えんとしたが、意外にも彼等が愛は益々深まるのみであつた、されど彼は、強て彼女と結婚せうとも思はなんだのである、それかあらぬか二人が間は、如斯く深まつたにも係はらて、彼は戀人を置いて伊太利に赴いた、此に於てか兩者が愛は破れたが、然も彼が心は彼女の爲めに泣いたのである、彼女の悲歎を思へる彼は、外套眞深かに身をかくし、密かに彼女が門外に彷徨て、終夜思に暮れて居つたのだ、本意なき友が勧めのもだし難く、世の義理に是非なく、**く、く、**も彼女と斷れんとした彼は、異郷に赴くその名残りに、せめて彼女の姿の、窓に映れる影なりと認めて、別れを惜まんものと、待つ間程なく奥庭より、去

りにし人を戀ひ慕ふ、思ひを琴にかき寄せて、絃は弾じけど晴れやらぬ、胸の思ひの悲しさを、聞く人ありともしらがねの、聲も妙にぞ謠ひける、琴の調べの一節は、窓の外邊に佇立める、耳傾けし戀人が、胸には如何が堪ゑたか、晴れ居し月も涙を雲の薄袖に絞りて、輝く星も消えなんやうであつた、嗚呼、思に惱む可憐の少女と、戀の果敢なきを夢の如くに悟りぬる多情詩人が、結ばれんとして結ばれざる戀の、いかに悲しくあつたであらう乎。

七、第七の戀人……十年間の密通

果敢なくも第六の戀に破れたる彼は、更らにウワイマルの新天地に入つた、彼は此所に集まれる幾多の文士と交りつゝある中に、公爵カール、アウグストの知る處となつて、千七百七十六年六月樞密顧問官に擧げられた、時に彼二十七歳、その失戀の餘情は如何でか新らしき戀人を得ては止まらうや、彼は此頃宮女にして調馬師の妻たる、男爵夫人フワン、スタインと親しんだ、彼女は七人の子女の母であつて、嬌艶人を魅すべき三十三才の婦人であつた、而して彼女は能

く讀み能く語り、又能く謠ひ能く奏したと共に、併せて詩文を味ひ得べき丈の
 の奇才を有して居つた、是こそゲーテの愛着したる基であつたのである。
 初め彼の彼女が肖像をバルモントに見た時には、彼は實に三晩の間眠るとが
 出来なかつた、夢幻ともなく彼が眼先にちらつく彼女が姿は、搔き消さんと欲
 するも消す術なく、地球は日の水平線下に没した後にあつても、長くその喧温
 を保つが如くに思はれ、心情は日の没せし後も猶暫くは暖氣を保つて居つた
 やうであつた、彼れは如斯氣高き婦人を見て、全くその魂を奪はれたのである、
 扱も彼女の良人は、一週一回より多くは其家に歸らなんだ、されば多情なる彼
 が心は、何して彼女に向つて動かずに居られやうか、日一日より兩人が親みを
 加へ、書翰の交換と彼等の往來は愈々繁くなつたのである、然も彼等が會合す
 る花亭は、彼女の家より程遠からぬ所で、その往く路は大樹鬱蒼として晝猶ほ
 暗きやうであつた、而して彼等は此花亭に於て相遇ふた事が、實に十年の久し
 き間であつたのである、嗚呼、如何に當時社會は亂れたりとするも、斯の長日月

の間、彼等が悖行多き交情を保ちたるには、又驚かざるを得ないのである。
 關守なき月日は何時しか過ぎて一千七百七十九年となり、彼はその春を以て
 軍務都督に任ぜられた、而して彼が年少無謀の激情時代は已に過ぎ去つた、彼
 がウワイマルに於ける墮落時代は、今や彼が良心を刺激して、彼は多くの日子
 を、感情と暗き情慾の爲めに、空しく費やされたを悟つたのである、此に於て
 か彼が行爲は漸次冷かとなり、彼は之と共に彼が情人たる十年間の親友……
 ……否な戀人、スタイン夫人に對する熱情も著しく冷かとなつた、彼は四十五
 才なる姥櫻の夫人を見ては、その變化の大なるを驚きしと共に、其良心に恥ぢ
 たのである、されば兩人が間は遂に遠ざかつて、其悖徳の交りは全く絶へたの
 である、然し乍ら憐むべし此多情詩人は遂に墮落社會を脱することが能はな
 かつたのである。

墮落時代のゲーテ

一、第八の戀人と私生兒

彼はスタイン夫人とその交情を絶つたが、猶ほ彼は墮落社會より脱する事が能はなかつた、彼は轉じて又クリスタチアチ、ヴアルピウスに向つてその熱情を捧げた、彼女は由來快活なれど教育なく、加ふるに逸樂を好むこと度に過ぎた女であつたが、その金褐色にして光澤ある頭髮と、鋭利なる雙眸とは、體幹の少なる風丰と相和して、彼の目には全く女神の如くに認められた、然も彼が彼女に對したる戀愛は、彼が墮落の事實を長く歴史に残して、正に拭ひ去ること能はざる大汚點を、彼と彼女との碑面に刻むに至つた、盖し此時代に於ける日耳曼の道德は、著しく荒廢して、放縱淫佚に流れ、醜風は到る處に吹き廻つて、社會は悉くも不徳の世とはなつた、されば男女の間に在る感覺は淫奢に傾いて、婚姻の輕んぜられたる適證は、ソフ井一、アルヌールドの、妻まじくも「姦淫の聖式」と稱したのに依ても明かであつた、されば、婦人社會に持て讃された彼の、共に斯かる陷阱に轉落するも亦止むを得ざる勢であつた。

千七百八十九年十二月二十五日、社會の人々は基督の誕辰を祝ふたる日であつたのに、クリスタチアチは産褥に在つて長子アウグスト、フワン、ゲーテを生んだのである、そこで彼は、彼女の母とその家族とを己の家に招いて同棲せしめ、彼は未だ結婚の大禮を擧げずして、早くも己に一家を作るに至つた、此に於てか、社會は如何に弊風に流れたりとするも、彼等が此醜行に向つて非難の聲を擧げたのである、さればあはれなる彼女は、是時より交際社會を追放せられた、爾來此の醜態なる家庭は、千八百六年の秋迄續いたが、その十月十九日、彼等は遂に結婚の正式を擧げ、彼は再び交際場裡に入る事が出来たのである、是れ即ち此編の最初に記したる處である。

「高木氏ゲーテ参照」

二、妻以外の情人

社會非難の中に、戀人と契りて私生兒を擧げたる彼は、正式の結婚をなしたるに依てその醜態を蔽ひしが如きと雖も、然も彼は己が妻以外に猶幾度か情人

を近けたのである。彼は結婚後僅に一週年を経ざるの間に、少女ベッチを愛して大に醜聲を放つた。此ベッチこそ彼がフレンクフナルトに於て、共に戯れたるマキシミリアチの娘であつたが、處女といはんよりも寧ろ妖怪に近き魔婦人であつた。嗚呼、子までなしたる妻の外に、斯かる少女を愛したる彼が墮落や、實に詩人とし世に知られたる彼が行爲としては、正に言ふに忍びざる汚點である。然も多情なる彼は、ベッチの外、猶ミナ、ヘルツリーフにさへその愛を向けたのである。此少女はイエナの書店フロムマンの家に育てられたる處女であつて、彼女はゲーテが特に熱愛したる情人であつた。されど彼女は彼と別るゝが爲めに學校へと送られたのである。爲に兩人が間は遂に遠ざかつた。

晩年の悲劇

母の死、昔の戀人、夫人の死

千八百八年九月十三日、彼が母は七十八歳の壽を保つて此世を辭した。幾多墮

落の社會に陥つた彼も、その慈母に對しては全く善良なる孝子であつた。彼がその母を生前に愛したることは、實に彼の母の幸福なる老齡の光榮であつたのである。されば彼は母の死に接して、悲歎最も大なるものであつた。

是より後に於て、彼は曾てウエツツラーに於て相慕ふたる昔の戀人、シャールツテに相會ふた。彼の女は時に十二人の子女の母として已に孀婦となり、ウワイマルに來つて彼を見舞ふたのである。嗚呼彼等、相別れてより茲に見ざりしこと四十有四年、思へば如何にも速かなる星霜は、彼等、の紅顔を剥ぎ、彼等が氣力を奪ひ、又將に彼等が生命に向つて、その冷かなる手を伸さんとするに對して、如何に彼等は無限の感動に驅られたか、彼等はその舊時を追想して、共に熱き同情の涙を注いだであらう。

而して彼は此奇遇に次で、最も悲しき事件に遭遇した。彼は命長きが爲めに屢、人生の悲觀を見たが、彼は又將に感情の大震動を蒙つたのである。そは彼が半身として彼を助けたること二十八年の長き間、苦樂を共にしたる妻のクリス

チアチは、當時二豎に犯されて病牀にあつた、彼は妻が病氣を見舞ひ、その手を執て熱涙を注いだ、そして妻に向ふていふたに、

「卿は予を棄ないだらう、否、々、卿は予を棄つるものではない」と、されどそれは無益であつた、彼女が天命によりて閉ぢらるべき眼は、終に長く開かるべくもなくつて、彼女は遂に永き眠についた。

老後の戀

獨逸のおはん長右衛門

彼は年に於ては老いたりとも雖も、猶鏗鏘として肥胖康壯、額上漸く一皺を就けし計りであつて、その頭も未だ禿ぐるに至らず、褐色の巨眼は舊に依つて炯々として人を射て、正に七十才の老詩人とは見受けられなかつた、彼は啻にその身軀に於て健康なりし計りてなく、生命の生命たる愛の力は、猶殷々として衰ひなんたのである、彼は老いて益盛んであつたのである。

然も此老痴漢は、七十四歳にして、マリリンバットにフレウライン、フワン、ウエゾーに逢ふて、彼の愛情は茲に挑發せられ、再びウエルテル時代に回つたのである、彼は充分ある熱情を以て彼女と結婚せんとしたが、朋友の嘲言冷笑を恐れて遂に止んだ、而して彼は彼女の家を辭し去るの馬車中に於て「マリリンバットの悲歌」を唱へて、自ら戀の餘情を慰めたのである、然も此父に等しき老翁と戀を交へたは、啻に彼女計りてはなかつた、ザイマノスカも亦彼を戀ふて、狂せん程の情人の一人であつた。(同上)

ゲーテの末路と其最後

一、榮譽の勳章

近世的生活の代表者として、獨逸文壇に雄飛したる彼は、一千八百〇八年、エルフナルト大會議に於て、ナポレオン一世に知られ、彼は政府より勳一等十字章を贈與せられ、それよりウワイマルの大公國に列せらるゝに及んで、更に白鷲

勳章を授けられ、三千弗の俸を給せらるゝの外、別に服装料をも下賜せらるゝ身とはなつた、此に於てか彼が名聲は益、世に稱讃され、伊、英、佛の三外國に迄傳はつて、當時嘖々たるものであつた。

一千八百二十七年、彼は七十八才の誕生日に、バフュルン王は、ウワイマル公に導かれて、彼が下に到り、授くるに十字大勳章を以てした、是れ皇帝の允許なくしては與へられざる、最も光榮ある勳章であつたのである。(同上)

二、ゲーテの終焉

時は一千八百三十二年三月十六日、彼は神經熱に罹り、超へて十九日に至りては益、重體に陥り、その深更に至つては四肢氷の如くに冷へ、顔色は灰の如くに變じ、胸痛は愈、劇く起つて、呻吟の聲は聞へられた、それより病は篤りて、彌、人事に遠ざかつた、その最終に聞くを得たは、「更に光明」の二語のみであつた、彼は力の續かん限りと、食指を以て空に書き、そして又何事か語つたが、それは已に傍人の耳へは達しなかつた、かくて獨逸希世の大詩人は、靜かに永き眠

に就いたのである、時に十九世紀の三十二年三月二十二日であつた。

嗚呼、英傑ナポレオンと共に、近世史上に光榮ある偉名を博したる彼も、茲にウワイマル一杯の土と化し、英魂去つて復歸らず、墓標を吹く秋風は長へに詩人が死を悲むものゝ如く、遙かに聞ゆる教會堂の夕鐘は、彼か後を吊ふが如くである。

英國詩人 戀のバイロン

多情——多感 英國の業平

往古稀世の文豪チャョーサーが、一度絶大の詩筆を振つてアングロサクソン文學の美を作してより後五百年、歐土に於ける文壇は、英才偉哲彬々として輩出し、大篇鉅著蒸々として現示した、就中十八世紀の末より十九世紀の初年に於ける斯界に至つては、洵に千古の盛觀を極めた、然も此世紀に出で、此文壇に樹つて、屹然その詩風に反動したる新詩派が、將に一方に勢力を得やうとした時に當つて、詩風は舊態を奉じながらも、思想は飽く迄革明的、破壊的なる新文豪として、雷名一時全歐を震盪させたる貴族の大詩人こそ、英國に現はれた、开は誰人である乎、ジョージ、ゴルドン、ノエル、バイロン卿こそ其人である。

彼が卓拔秀優の尙風は、貴族であつて能く平民の友となり、強國に生れて能く

弱國の朋となつたは、蓋し當年稀に見る處の偉傑であつた、就中その自由でふ義の爲に力を希臘の軍に盡し、男爵たる貴族の身を以て、異郷の戦地に赴いたるに至つては、何ぞ其の志の美にして、其情の至れるや、然も斯の詩人が戀の活劇に到つては、其生涯の遷轉著しかつたに伴ひ、或は失戀の人となり、或は樂しき戀の成就を見、又忽ちにして落莫の悲境と變じ、或は異郷に艶名を流し、後世多情詩人が好型として、最も趣味ある歴史を残した、彼は實に英國の業平として其艶名を後世に傳へたのである。

嗚呼、彼れ逝いてより星霜既に過ぐるること七十有餘年、ハックネル寺院の墓、ハミルトン公園の像、共に慘風場裡に轉た故聖が跡の、追ひ難きを感じせしむといへども、その隆々たる名聲に至つては、又何れの時にか滅びやうや、さても此詩人が戀の活歴は何んまであつたらう乎。

家庭と幼時

天賦の美想

蓋し遺傳は人物を作り、名門は俊傑を出すことが多い、豈に雄鷹の鷹兒を生まうや、さればその人物の如何を知らうと欲したならば、先づ宜しく其系統より知らなければならぬ、さても詩人バイロンが祖先は、如何なる人であつたらう乎。

按ずるに、十一世紀の末より英國の支配權は、サクソン王家よりノルマン王家に移され、ウヰリアム王は英國に君臨した、彼の祖先も實に此時共に附隨し來つたのである、そしてホレスタン城の貴族として、尊ばれたるバイロン家は、屢屢忠君偉功の勇士を出し、ヘンリー八世の代に及んで、ニュステッド寺院を賜はり、後チャルス一世の時、バイロン家は八名の勇士を出して忠勤を盡した、此に於て男爵を授かつたのである、實に彼が祖先は、沈平靜寧の君子を出さなかつたが、剛劇忠烈の勇士は數多く出た、故に春花爛熳たるやうな風を保たなんだが、嚴冬松操の威を保つた、されば偽善に戦つた彼が筆、義軍に盡したる彼が誠は、誰れか祖先の遺風に負ふ處なしと言はふや、而して彼が父に就ては

傳ふるに足るものがない、唯始めカアマルセン侯の夫人を誘拐し、後カザリン、ゴルドン嬢を容れて妻とした、是即ち彼か母である、此兩人の間に千七百八十八年一月二十二日、ロンドン、ホルス街に於て男子が生れた、是實に詩人バイロンであつた。

彼は四歳に至らざる以前、早くも父を失ふた、爾來彼は専ら母の手に於て育てられたのである、然も其母は過敏の婦人であつた、火山的の婦人であつた、されば時として頗る慈愛であつたが、又時としては頗る酷待した、それかあらぬか、後年英國の業平とも稱せられた彼は、幼にして跛とはなつた、そして彼が男爵家を承いたのは、實に十有一歳の時であつたのである。

彼は幼にしてロジャースに就て學ばんだが、更に博士グリーンニーに従ふて學を修めた、而て少時に於ける彼は、早くも已に其驥角を現はした、彼が母の下を出て、ハローの公立學校に入るや、その高秀なる才能と機敏なる慧智に至つては、正に是れ梅擅の二葉より香しきが如くであつた。

彼は少時より「美音の紳士」として持て贅やされた、彼は實に詩人たらずんば演説家となつたであらう、然も彼が年未だ十五に至らなかつた時に、郷を走らうとした折、唱ひたる譜の如きは、家祖か武勳を贅する處、そが懷舊の念をば示す所は、全く彼がその祖先に私淑して居つたのである、而してそのバラターに在るや、山青く、水清らかに、自然の美の秀でたる處、多思多才の小兒、紅雲彩霞の未來詩人が、如何に恍然として愛したるか、後年大詩人として世に名を博したるもの又偶然ではない、而して此少年は、早くも戀の山路に分け入つた。

稚なき戀 戀人の墓

由來多感多情のバイロンは、未だ愛てふことを知らうとも思はれなんだ頃は、や既に戀の衣をば纏ふたのである、彼が思を焦した戀の女神なる少女の名は、メリー、ツッフと云ふた、而して此メリーは、性質温順なる、眼清く、涼しげなる少女であつた、彼は後年人に語つていふのに「自分は當時未だ物心も解り兼

ねた位の身でありながら、何うして戀といふことを知つたのか、自分でも殆んど判明し得ない心地がする」と、想ふに彼バイロンがメリーに對する戀は、恰もそよ吹く風に漂ふ白雲の如く、又は朧ろに見ゆる蜃氣樓の如きものであつたらう、然し乍らその戀は、永く彼が記憶に存して、時に彼をして自ら笑を催さしめた。

關守なき月日は、茲に何時しか過ぎて、彼は十二歳の春をば迎へた、時に、一日從姉マーガレットと相會した、マーガレットは實にバーカー將軍の娘であつて、溫雅敬すべきその舉動と、清麗愛すべきその美貌とは、此後多情なる詩人をして迷はしめたる事幾干であつたるか、彼も亦キユピット童神に惱まされて、雨の夕、露の朝、如何に其幼なき胸を苦めたか、戀の女神の優しき姿は、夢幻ともなく彼の目先へ現はれて、彼は思の餘り眠らなんだ事も幾宵かあつたのである、而してマーガレットに於ても、亦バイロンを愛せなかつたてはなかつた、此兩々幼き戀は、互にその前途の長からん事をば願ふたであらうが、星霜は白駒

の如く、世の中は三日見ぬ間の櫻に似て、彼等一度戀の袂を分ちてより一年有半、何ぞ知らうや、蕾の花は夜半一陣の魔風に誘はれて、悲報悄々、彼の耳を打うとは、嗚呼マーガレットは逝いた、思に焦がれしバイロンが無情の感は、果して如何であつたらう乎、その始め彼のマーガレットと初めて相見えた時に、彼は詩に事寄せて戀の秋波を彼女に傳へた、未來世界に、其艶名を残したる英國業平の少年詩人が、其筆を詩篇に染めたのは、蓋し之を以て初めてあつたのである、爾來窓を打つ雨に連れ、戸を叩く風に連れ、その冥福を祈つて居つた彼は、千八百〇三年、此逝きにし戀人の墓を訪づれたが、彼は感慨悲愁交々胸に迫つて、此處を去るに忍びなんだ、教會堂の夕鐘傾陽を山の背に送りて、ねぐらを急ぐ百鳥東西に飛び通ひ、悲風幽として墓邊を掃ふの所、喟然として吊魂の詩を唱へた、その一節に

此の狭けき穴中にこそ、

土となりにし彼女はやすむらめ、

その土には活ける氣の、

輝ける折もありけるものを。

と、哀れにもいたはしきその餘聲は、眞に开を聞くものをして、限りなき悼愁の感に堪えざらしめたてあつたらう!!!。

悲惨の失戀

一、戀人とは敵同志

此後彼はハローの公立學校に入つたが、此時代に於けるバイロンは、實に奔流飛沫の勢であつた、然も此學校のほとりにある一寺院に、「バイロンの墓」と、悼名せられた小さき丘がある、そして此丘は彼が雨の朝風の夕、沈然として常に深く黙想して居つた所であつた、嗚呼萋々の草、茂りては枯れ、枯れては又茂り、今尙此青年詩人が、限りなき韻聲をば傳へる、而も彼がハロー修學時代の後半期に於て、その最も悲惨なる事件を尋ねたならば、何人も彼が「失戀」を以て

答へるであらう、全く此失戀こそ彼の一生を通じて、至大なる影響をば與へたるものである、さてもその失戀とは何であつたか、今その眞相を記すであらう、英國ニユーステッドなるバイロン男爵家から、程遠からぬアンズレーといふ所にチャウオスといへる郷士があつた、而してバイロンの祖父に當れる、提督バイロンの兄弟に、活潑と勇敢とを以て名高かつた、バイロンと呼ばれたる傑士があつたが、近隣なる郷士チャウオスと、決闘し、遂に之を殺した、然るに何ぞ圖らん此チャウオスこそ、多情詩人バイロンの戀ひ慕ふたる少女の祖父であらうとは、此チャウオスの家に、メリーと呼べる少女があつた、氣質高尚にして性姿溫雅に、豔嫵たる舉止と輝媚たる麗貌は、正に蕩然として多情の男子を斃殺する程であつた、時は維れ一千八百〇三年、バイロンは休暇を得て、ニユーステッドの己が家なる、男爵邸にて月を費した事があつたが、家族のものに連れられて、幾度ともなくその家を訪づれ、後には同家へ起臥するやうになつた、性來多感なる彼は、朝に手を携へて裏庭に遊び、夕に食卓を連ねて相嬉笑し、彼思ひ、我

慕ふの情は彌深みて、彼は一日恍惚として彼女が妙なる姿の、雨に綻ぶ白ばらの清けきが如くなるに感じ、また遂にキエビット童神に誘はれて、戀の奴とは相なつた。

彼は戀人の一行と共に、キヤスルトン地方に旅をした、その途次水を横ぎり、丘を越え、行き往きて其ダーヒインの洞に到ると、小舟を浮べて流れを渡つた、之に乗るものは彼と戀人メリーとの二人のみであつた、岩に當つて碎ける水は、岸を噛むらんが如く、叫びつ、吼へつ、散りては千々の白珠となり、集つては瀾瀾たる波浪となり、酔はすが如く、魔するが如き、惚かす計りの自然の景は、飄乎として意中の人と共に、彼をして仙境に遊ぶの思ひあらしめたであらう、此美なる水邊然も生きたる美の神と舟を同ふする彼が情裡は、果して如何であつたらう乎、彼れは後に自ら語つて言ふに、「余は當時の感を想ひ起しても、到底开を寫し出すことは能はない」と、以て其意外に樂の深かつたことを推知し得るであらう。

彼の眼より見たる戀の女神は、音樂の美を好み、且つ愛し、常に之を奏した、未だその技に熟達したといふ程ではなかつたが、洋々の響きと朗々の聲は、戀の奴となり了つた彼をして、魔するに餘りがあつたのか、彼は其音樂を以て、天女の奏音とも感じつゝ、無上の樂として聞いて居つた、さるに誰か知らん、此妙なる美の樂こそ、後日他の人をば慰むるの聲であらうとは！。

當時如何に、彼が戀の爲めに熱心であつたるかは、自ら語るに「我等の結婚にして成就したならば、祖先が互に濺きたる血をかへし、爾來重なる反目を相和して、一大地領を併せたであらう、彼女は我より二つの歳上であつたけれども、之を以て素より年齢の不似合ともいふ程でもあるまい」と、されど月圓かならんと欲すれば妬雲之を覆ひ、花開かんと欲すれば狂風之を散らす、嗚呼人生意の如くならざる、唯に血に鳴く時鳥の不如歸たるのみであらうや、彼も亦此不幸に誘れて、遂に其希望を達さなんだ、戀人は郷士ムスターを愛せり、彼女の情と愛の心は、全くその方に向つて傾いた、されば彼は終に失戀の人たらず

んば止まなかつた、果敢なきは戀か、戀其のものが果敢ないのか、ニユステツ
ドの貴族、バイロン男爵が戀は、實に戀の詩人として、其艶名を歴史に留めしむ
るに至つたのである。

二、戀愛と友愛

蓋しメリーは彼を愛せなかつたではなかつた、されど其愛は「戀の愛ではなく
して、全く「友としての愛」であつたのである、されば初めより、彼の戀情をば知
らなんだではなかつた、されど之に委すに一身を以てせうとは期さなかつた
のである、故に彼女の彼に對する行爲は、恰も姉の弟に於けるが如き愛であつ
た、ハロー學生の棟梁たる彼も、彼女の眼よりは一小童としか見えなんだ、而
して彼も、メリーのムスターを愛せしは知つて居つたのである、されば彼は、
嬢の結婚するに先ち、一日アンズレーの丘に歩を同ふした時、徐ろに嬢に問ふ
て言ふに、「余と次回に會する時は、御身はムスター夫人とならるゝであらう」
と、嬢靜に之に應へて「妾は左様に望みます」と、嬢は全くムスターを愛したので

ある。

一千八百〇五年、彼の最も悲しき其の中なる一つの日は來つた、彼が戀ひたる
メリー嬢は、遂にムスターと結婚した、此報一度彼が下に達するや、彼は悲風淒
淒、昨日迄和氣霽々たる樂しき世界は、一變して愁また愁、彼は遂に失戀の人
とはなつた、思に餘りし彼は、その舊事を回顧して追慨轉た禁ずる能はなんて、
慘然たる短詩を嘯した。

思ぞ淺き、わかきみの、

踏みにし岡よ、アンズレー、

物淋しげに、荒れにけり。

北より巨る、あらしかぜ、

戦きながらに、聲立て、

吹くや茂みに、なれがかけ。

樂しき時よ、消え果てよ、

昔好みし、たとり地も、

今は何處に、求むべき。

笑みにしメリー、去りぬれば、

今は汝が身、ひさかたの、

御國を見らん、すべもなし。』

(實氏マイロンの一節抜摘)

嗚呼、マイロンは戀した、戀ひて而して失戀の人とは成り了つた、斯の悲傷一たび愛の心を殺げば、また輒く癒り能はない、見よ、彼が後年公衆場裡に於て、幾多の成功があつたにも係はらて、その家庭に於ては、常に不幸の絶えなかつたのは、何ぞ悲雲の出没なきを保せんで、想ふて此所に至つたならば、その情の憐むべき、何ぞ一に茲に至つたか、歳寒うして山瘦せ、木枯れるの狀ではな

いか、誰か一掬憫惜の涙を注がいてならうぞ。

東歐漫遊中の戀

アゼンの少女

彼は千八百〇五年ケンブリッヂ大學に入り、翌六年始めてその詩篇を出した、越て同九年三月、彼は上院に入つたが、その七月雅思優々、飄然として歐洲航途に就き、往く行く到る處の山水舊趾を歌ひ、自然の美を眺めて、忽然アゼンに歸り、故英國副領事未亡人の家に客となつた、然るに此家に數名の少女があつたが、その始めの姉が最も彼と親んだ、彼が歌ふたる「アゼン」の少女は蓋し此少女の事である、此少女と彼との關係に就ては、彼を以て少女と最深の關係を有して居つたといひ、兩人の間は、友としての愛といはふより、寧ろ戀の愛があつたと言ふこそ適評であるといふものもある、その證として、彼が詩篇を擧げるものもあるが、俄に虚疑は判じかぬる、畢竟するに熱血多情なる彼か常として、到る處その艶名を流したる所のものは、全く光る源氏の君が、英國の業平たる彼

の美貌が、その艶名を流さしめたる基に外ならない、されば此時に於ても、彼の少女に對したる心は、潔白なる關係の外、何ものも存ぜなかつたとも考へられる、加ふるに美しくしなくして、その風姿彼を惹く程のものでなく、又愛嬌の彼を惹くべしとも思はれなんだ、たゞ性來が性來故に、或は何程かの話柄は慥かにあつたものであらうか？

始め彼の英國を去つて、乾坤清朗なる南方に進むや、白波澎湃の海洋に上りたる時、その浩蕩たる水天と、龍躍り、虎嘯くやうなる波浪とは、如何に此多情詩人が雅襟を啓かせたであらう乎、然も翻つて故國の空を眺むれば、刻一刻、轉一轉、茫漫としてまた天涯萬里、その果を認め難からうとする計りであつた。

故郷の岸よ、いざさらば、

消ゆ青藍の、水のうへ、

夜風はむせび、波吼えて、

叫ぶは野生の、海かもめ。

(實氏マイロンの一節)

夕陽波端に傾いて斜光海面に映り、満目唯だこれ宛然たる銀世界の如くであつた、輕風は徐るに櫓を吹て、彼が故山を離るゝを喜ぶものゝやうて、「咬岩」は已に遠ざかつて、其雙眸の外に隠れた、さらぬだに多感の彼は、何ぞ斯の天然の美に接して、豈無限の感慨がなからうや、彼は舷頭に起つて世俗社會の壞癢を罵つた、思ふに「予は人を少しく愛するのではない、されど自然を多く愛するものである」てふ彼の心は、蓋し此時に於て神秘の極に達し、その琴線にや觸れたであらう、而して此行、彼がマルタに達したる時、スペインサー、スミス夫人と相親みたる外、彼に就ては又何事の話も聞かなかつた、而かも彼が「チャイルド、ハロルド」の内なる、フロレンスは實に此夫人のことを書いたものである、その外尙強いて二一の佳談を擧げたならば、浪上の死罪者を見て、「ブライイト、オフ、アピドス」の詩思を起したのと、將に罪せられんとしたる少女を助けて、「ジョー」の趣構となしたるなどであらう。

憶ふに、當時美人の足を東歐に惹くもの甚だ少なく、寥々として又數ふるに足らん位であつた。然るにバイロン、泊落飄焉、希水の霧に眠り、西山の雲を吸ふて、洋々たる美の神の面影を追ふたは、實に異とする所である。然も失戀の餘情溢れたる彼が、微を穿ち、緻を極めたる手腕の卓絶なる、正に當時の文壇に於て、一頭地を抜くの概があつたであらう。

戀の一年有半

彼の結婚

幸? 福?
是? 非?

一、理想の妻と戀人

バイロン一度「チャイルド、ハロルド」を世に出すや、英國の文壇は彼を以て「斯界の王」と激賞し、その上流にあつては、やんごとなき執政親王の如き「予はチャイルド、ハロルド」の著者と、舞踏場に相見えたのを嬉ぶものである」と言はしむるに至つた、而して斯の彩霞紅雲の裡に筆を走らせつゝあつた彼は、最も

幸福なる、又最も不幸なる一大波濤に遭遇した、その波濤とは何であるか、即ち彼が不幸なる結婚である。

抑も人生全涯に於て、最も重きを置くべきものは結婚である、是に依て幸福なるホームの樂みも見らるべく、是に因て一身の不幸も招くのである、實に結婚は人生喜憂の岐るゝ處、而して彼の結婚の如きは、眞に千古の恨事といはずばなるまい。

二、戀の樂は一年有半

國の東西を距てず、世の古今を問はいて、總て世に知られたる詩人の戀を見るに、蓋し結婚に依て幸福を全うしたるものは寥々寂々、その例を求むるに難い所とする、之を要するに詩人の多感なる、妻たるものゝ之に對する勉め又難いからであらう、然れども彼とミルバングとは、一千八百十五年一月、遂に結婚の式を擧ぐるに至つた、バイロン時に年二十八歳、爾後僅に一年有半の短日月にして、此結婚は破るゝに至るの不幸に接した、彼は之に因て、不名譽の人となり、

夫人は之に因て又不運の人となり了つた、而して此結婚や、その始め如何にして纏まつたか、予は今茲にその眞狀を捕へ來つて記すであらう。

想ふに彼と婦人は、大に深重の關係がある、實に彼が生涯の一部は、全く婦人との關係とを以て満たされたるものである、婦人は或意味に於て彼の支配權を有して居る」といふが如きは、眞に或る部面に於ける理の當然たる所であつた、是れ幾世の後に於ける人々の、彼が徳性の爲めに痛惜する所である、その傑作「チャイルド、ハロルド」の成功するや、彼は多く婦人間に知友を得、それと交り遊ぶことが夥しかつた、就中後年メルボン夫人として知られたる、カロリン嬢の如きは、殊に彼とは親しかつたのである、嬢は彼を以て、稍々狂人に近しと迄その日記に認めたのにも係はらて、自らバイロンと交際を結ばんとして、屢彼の家を訪ふた、そしてバイロンも亦嬢の家を見舞ふたのである、然も嬢を彼に介したるは、實にゼルシー夫人であつた、案ずるに逆境に於て、此多情詩人を迎へたる一人である。

偶々「妻は我が爲めの救濟者であらう」との言、彼の口より發せられるや、其目ざす處となりたる婦人は誰であつた乎、他なし是れ前に述べたる、ミルバンク嬢であつた。嬢が麗姿の艶腰と、その溫雅なる天性とは、彼をして如何なる異様の感を浮べさせたであつたらう乎、されど時非にして彼が目的は、一度拒絶せられた、その時に於ける嬢の言葉に、「結婚は拒んでも、交際だけは許されん事を希ふ」と、實に彼と嬢との關係が、此時を以て斷られたなれば、此の才子佳人の爲めに如何計り、幸福にてあつたらうか、されど不思議にも、妙なる戀の神は、彼等をして益々親密なる交際を結ばしめた、彼の二度び嬢に結婚の申込をなさんとするに先つて、彼が知友なる一人の婦人は、彼が爲めに其不可なることを告げて、深く开を止めた、而して嬢を措て、他の婦人を擇ばんことを勧めた、彼も亦た其言を納れて更に他の方面に於て、適當なる婦人を求めんことに勉めた、その中の一婦人の如きは、彼が機才ある點と、高尚にして活量なる點とに於て、實に彼の妻たるべきものに適したが、遂に彼が目的を叶へて、その望を

容れなかつた、此に於てか一度静まりし戀の焰は、再び彼が胸に燃ゆるに至り、その目的は轉じて、終にミルバンク嬢に再歸した。

三、熱情は戀人に集まる

一語の力も克く天地を聳動する、況んや五寸の筆、一度走つて赤誠を示したならば、鬼神と雖も亦之が爲めに泣かざらうや、彼が送りし二度目の申込書は、然かも句々言々、唯だ熱情の溢れて玉となつたるものであつた、之を手にしたる嬢の、焉んぞ其の心の動かざらうや、加ふるに、天才已に詩人たらしめたるバイロンが、最も力を注いだる文にてあれば、彼女は遂にその乞を承諾した、蓋し嬢の承諾や、全く彼が書翰の熱血なるに迷つたの乎、寧ろ「英國文壇の王」と稱賛せられし彼の英聲と、ニユステッドの名譽なる、バイロン男爵なる貴族の肩書とに迷つたであらうとは、是れその當時或方面に於て、傳はつたる流言であつた、吾人は今其の眞疑を明言し能はないが、然し乍らその承諾の餘りに輕舉に過ぎたを斷言するに躊躇しない、勿論バイロンが熟考と深察とが、その宜

敷を得たので、遂に生涯の一大事を誤るやうに到つたのも、畢竟ずれば、彼が効果を求むることが急であつたからであらうけれども、亦た何ぞ其の不謹慎なるの甚だしかつたのに歎ぜざるを得ないであらう。

四、奇兆と意外

時に偶然にも不思議の異兆があつた、嬢が承諾を傳へた返事の、彼が下に來つた時に、丁度彼は食事の爲めに卓に着いて居つたが、又その園丁が、故バイロン夫人の結婚指環を發見したと同時にあつた、而して此指環は、多年紛失して居つたもので、彼はそれを見て、「余は此指環を以て結婚するであらう」といふた、然るに何ぞ知らん、之は彼が爲めに却つて凶なる兆を示し、彼等夫婦は、恰も故夫婦と同じやうなる悲しき境遇を見やうとは。

されど彼等が結婚は、最初よりは、不幸ではなかつたのである、その婚禮は千八百十五年一月、嬢の父サー、ラルフ、ミルバンクの家に於て擧げられ、彼が親しき友で、旅行の同伴たるホブハウスも、共にその席上に列つた、而して其式の終

るや、新夫婦は馬車を驅つて外へ出てたが、その際夫人はホフハウスに向つて「妾等にして幸福でなかつたなれば、开は全く妾の罪である」といふた、然るに此樂しき時は僅に一年有半にして、夫人が言は、不幸にも眞とならうとは、然し乍ら新夫婦が和合は正に確であつた、此時バイロンが、新夫人ミルバンクに對し、誤つてミルバンク嬢と呼んで大に赤面したといふ笑話さへあつた、此に於て彼等が知己朋友は、皆その平和なる新夫婦の出現を喜んだ、就中その結果の如何を氣遣ふた彼の姉なるレイ夫人さへも、「彼等は樂しき夫婦である」と、その友なるホヂソンに語つた位であつた、況んや其他に於ける斯の新夫婦が、水火相適はざるを恐れたる多くの人々は、何れも意外の感に打たれたのである。而して此樂しきホームの一朝にして破るゝに至つたものは、全く之を要するに、夫人がバイロンの妻として………此多血詩人の妻として、相適しなかつたのである。されば夫人は如何なる人であつたる乎。

由來彼れバイロンが性質は、激烈にして恰も火山のやうである、彼が行路は崎嶇でなくてはならぬ、難境でなくてはならぬ、奇巖起伏して水流激するの間を走らうとする舟筏は、尺隙丈端を船航するの險をば、豫じめ覺悟して蒐かると同じやうに、此多感なる詩人と、生涯その苦樂を共にしやうとする夫人は、先づ彼と共に慘地に入るの覺悟がなくては往かぬ、そして此覺悟はどうしても凜凜乎たるの勇氣が必要である、然も凜々乎たるの勇氣は、之を堂々たる女傑に於て始めて望むべきを得るものである、到底之を、滔々者流の貴女淑嬢に於て望むべくもあらざる次第なのであつた、知らず、彼の夫人は果して此要素があつたらう乎、その性行はどんなであつたらうか？

バイロン夫人 思想と行爲

夫人は名をミルバングと稱けられ、サー、ラルフ、ミルドングの愛嬢にして、彼のウエンツウ・ス卿の姪である、由來貴族的教育の家庭に於て、人となりたる婦人であつて、容姿頗る艶麗、嬢の彼と結婚せざりし以前に在つては、ミルバ

シルク嬢として上流社會に貴重せられ、結婚後にありても謹肅なる淑女として文士の間で噂炙せられ、彼自身も亦シルク嬢の淑徳を是認して居つた、實に正面より見たる嬢は、眞面目なる貴夫人の模型としては、先づ當時指を屈せらるゝ一人であつたは疑を容れない事實である、されどバイロン夫人としてのシルク嬢は、餘りに眞面目であつて、又餘りに雅量の狭少のものではならなかつた、世には一種の婦人がある、朝夕その良人が談笑の舉動に注目して、一嬉一笑、一怒一憂、悉く決して寸毫も斟酌を其の間に施さない、微々たる瞥見をば捕へて、其の本心の發現であるなどと誤解し、所謂風聲鶴唳、疑心暗鬼を生じ易いのは、之れ即ち女性の弱點であつて、普通の婦人にあつては、其例尠しとせない所である、殊に彼なんぞは、時としては崇高なる天使のやうにもなり、時としては又亂激狂鬼のやうにもなるものである、故にその一端を察したならば、最も親しむべきものゝやうであるが、又その他端を觀たならば、實に肅然たる烈秋の畏るべきものがなくてはならぬ、されば彼と起居を同ふし、禍福

を共にし、その一生涯を共にしやうとする夫人は、若しも徒らに鋭敏なる神経と、精細なる念慮とを使用して、其高低計るべからざるやうな彼が、一言一行に喜憂したならば、一日たりとも平和安隱なる家庭を保つことは難いのである、言を換へて之を言ふたならば、彼が妻たるものは、多言多辭、徒らに得々たるのを望むのではなく、輕浮跳薄なるのを願ふのでないが、克く泰和に、克く柔順なるのをば望むものである、されど和順も過ぎてはいけぬのは言を俟たん次第だ、若し彼にして激し、或は憤ることがあつたとしても、夫れを聞き流す位に止めて、敢て深くは進んで關しないが良いのである、そして時に諫むべき、問ふべきことがあつたならば、宜敷好き折を俟て告げる程の、廣く寛しき雅量がなくてならぬ、而して彼女は如何であつたらうか。

彼女は温順なる性質であつた、そして其性質は彼女が美德の一として認められた、バイロンの友は、皆彼女が美德を讃めないものはなく、彼が姉たり、親友たりしレイ夫人、アーガスタなんぞは、妻はバイロン夫人の温順で丁寧なる態度

が、妾が弟を幸ひし、且つ开を樂しましむるを喜ぶものである」と言はれた位である、而して彼バイロン自身も、彼女が温厚であつて、親切なるのに上越したものはないと、他に語つて居つた。

夫人は哲學的趣味を有して居つたと共に、又文學的思想にも富んで居つたのである、それ故に彼の詩才に對しては、深く崇敬の念をば呈した、而して常に良人が詩を愛誦し、結婚の後彼が爲めに詩篇の清書や謄寫をばした事が少なくなかつた、加ふるに夫人もまた、散文をば能くした故に、其のものしたる書簡文等は、着筆淡々、然も貴族の夫人として、此詩人の妻として、決して愧ずる所がなかつたのである、實に此點に至つては、夫人の最も美しい長所として何人も許すので、吾人も亦、之に對しては毫も異見を挾むべき餘地がない、されど悲しい哉、人は萬能に長じたる動物ではない、溫和の反面には、その意志薄弱で、堅忍の氣に乏しく、事に觸れ、物に當りて動搖し易いのをば示し、加ふるに餘りに單純なる短長を有して居つた、又其の文學をば好む反面には、婦人故に餘り

に情があり過ぎて氣慨に乏しく、愛の波は満々たるも、勇ましき氣骨は無いやうであつた、而して彼女が眞面目なる單純の心には

行く船もなにかさはらんよしもなく

あしもなにはのみづのこゝろに。

たるが如きの慨は、到底望むべうもあらなんだのであつた。

落莫の離婚

一、愁悲の家庭

満々たる白帆を順風に揚げて、英國文海を疾走したる船は、時ならない逆風に遭遇した、曾つて一度は九天の上に昇されたる文豪も、今や將に九地の底に抛たれんとはせられた、前日不敬の論を稱したる、所謂似而非勤王家や、「コルセル」を攻撃したる阿世的操觚者輩は、彼が私行を幾十倍の誇張を以て世に暴露しやうとした、されば紛々たる幾百の異聞醜説は、惜し氣もなく捏造せられた、就中

其最も甚だしいものに至つては、彼を呼ぶに「悪魔の使ひ」とすら誣ゆるに及んだのである、さてもその非難の媒介である所のものは何であつたか、これ即ち彼が離婚の悲劇であつたのである、然し乍ら若し彼にして、平民的文學派の味方とならんで、専ら貴族的の味方となつて居つたならば、更らに加ふるに宗教上に於て、腐敗して居る僧侶を寛容する處があつたなれば、彼等も亦た彼を讒する事が少かつたであらう、吾人も亦然か信じて疑はないのである、されど彼は、他人の讒誣を恐れて世を憚り、權勢を懼て、而して其自信することを述ぶる能はざる程の弱流ではなかつた、彼は腹藏なく其意を吐露して、毫も屈する所がなかつた、故に彼等は、機措くべしと爲して、頗る激烈なる罵詈訶評を下し、先には自己等と同じ貴族より、斯の大詩人を出したるを榮としたものも、又たは彼が爲めに賞賛の辭を雨らして吝まなかつた彼等も、踵を回らして彼を排斥し、力を極めて之を讒誣した此に於てかバイロン一代の名譽は、遂に此離婚に依りて汚瀆せられた。

抑も堅忍不撓の心なきものは、實に勇氣のないのを表明して居るのは、今更言ふを俟たぬ次第であるが、彼等は結婚の後、幸福少なくして、不幸のみ多かつたのである、その第一なるものは金錢上の不如意と、第二なるものは彼が不健康とであつたらう、その第一に就ては大に世の注意を要すべきことで、元來バイロン家は、代々武士的貴族であつて、決して蓄財の念が無かつたのである、殊に彼バイロンの如きは、最も此特長の性を現はしたる者で、知己友輩等に金錢を抛つを吝まなんだ、その一例を擧げて見れば、彼は四面悉く楚歌の中にありながら、猶彼の友人に對する、平生の義俠的風習は失はなかつた、彼の文豪コレリツヂ、ゴットウインの諸氏が、金錢の缺乏に苦むや、彼は進んで之が救助に盡したのである、而して此時に於ける彼は如何であつたか、彼が貧窮は實に極度に達したるの時であつた、彼の家は日々債鬼の人を以て圍まれ、一ヶ年の内執達吏の爲めに押へられたる事が、實に四回に及んだ、而して書籍出版人として、彼と關係が深かつたムレーは、其困窮を見て同情の念に堪へて、直に千五百磅を

彼に送り、併せて數週間内に、更に又千五百磅の金を送ることを告げた、而して
 ムレーの心は非常なるものであつて、彼は總ての版權の利益を惜まんで、之を
 バイロンに供しやうとしたのである、然し乍ら男爵たる貴族の威嚴を保たう
 とした彼は、其金を受くることを拒んで、「足下の親切は深く之を感謝するけれ
 ども、その金子に至りては、斷じて之を受くることは出來ない」と述べた、嗚呼、
 世は悉く彼を罵るに迷つて居つたが、バイロンが行爲は實に斯くの如くであ
 つたのである、而して彼自身の家庭は、如何なる有様であつた乎。

二、多情の夫と眞面目の妻

多感多情の大詩人と、小心眞面目の婦人とは、何うして其家庭の調和を見るこ
 とが出來やう乎、その永く圓滿なる平和を望むのは、全く木に依て魚を求むる
 に等しき次第である、果せるかな、彼の家庭は落莫として悲氣蕭殺、凄風一陣
 吹いて、秋雨の冷かなるを覺ゆるやうであつた。

されば當年或る部分の批評家は、時に彼の滑稽なるのを見て、直に早計井を快
 活であつたと評したが、是れ丁度氷を覆へる春の花の如くであつたのである、
 彼は此時ヅルリ、レンの委員となつて同劇場の支配をした、而して彼が支配の
 良否に就ては、毀譽紛々として容易に是非を論ずることは難い、唯だ記すこと
 が出来るのは、彼が一身に及ぼしたる結果である、蓋し劇場の風は、その當時
 自由であつたものであるが故に、交際の亂雜であつたるが故に、關係者の謹慎
 てなうて活潑に過ぎたるに於て、何れも異なる所はなかつたのである、而も多情
 の彼は、此間に居して衆人と相接した、歌謠に妙なる麗娘もあり、舞踏に巧み
 なる美女もあつた、されば口善悪なき童の常として、數多の訛傳の高まつたの
 も、亦敢て怪しむに足らん次第である、その藝に巧であつたミス嬢の、味方を
 爲したる一事が世に噂せられたやうに、彼が藝苑のもの言ふ花に戯れるとい
 ふ説は傳はつた、就中マーダン夫人とは、關係の親しきものがあることさへ稱せ
 られた、而も此間に於ける彼と夫人の消息は如何であつたか。

素と嚴格なる貴族的家庭に人と爲つたミルバンクは、彼が行爲と財政の困難
 とに於て、一と方ならぬその心を痛めた、そしてバイロンが偶々の一言、以て彼
 女をして深く不快なる懸念の暗鬼を生ぜしめた、彼は結婚の始め、その妻に戯
 れて「予は御身が最初に謝絶したから、その復讐として結婚したのである」と、
 夫人は之を聞いて深く憂慮する處があつた、又その離婚に先づ事久しからざる
 以前にも、彼は妻に「予は獨り決然東方若しくは伊太利の地に遊ばうと思ふ」
 と語つた、之れ素とより一場の談笑に過ぎないのではあるが、而も小心なる彼
 女は、直に之を眞實であるとし、且つ憂ひ、且つ怨むに至つた、之に加ふるに貧
 困は益、甚だしく、負債は彌が上に増加し、祖先以來傳はつたるニユステッド
 寺院すらも、人手に賣るであらうかと思はしむるやうになつた、昨日迄はバイ
 ロン男爵の令夫人として、英國一流の大詩人の妻として、交際場裡に持て囃や
 されたミルバンクも、今や交際社會とは殆んど相斷ち、夜會、宴席などに出づ
 るやうなことは稀であつた、されば此時に於ける夫人が最大の勉めを問ふた

素と嚴格なる貴族的家庭に人と爲つたミルバンクは、彼が行爲と財政の困難
 ならば、宜しく良人を助けて家政の衰微を整復し、バイロン家の面目を全ふす
 る事に盡さなければならのであつた、然るに不幸にも、彼女には此難局に當
 つて家事を處するの勇氣と手腕がなく、爲めに彼等が家庭をして慘然たるの
 悲境に陥らしめたのは、實に慨歎の至りに堪へん次第であつた。
 彼が劇場に出入して、世の不評を招いたのと共に、家政は愈、債鬼に苦めらるゝ
 所となり、家庭は茲に於て漸く慘然たる聲を聞き初めた、然し乍ら彼が夫人に
 對するの眞情は依然として舊に變らなかつたのである、さればその一言一行
 が、時の感情の如何に依て、或は狙れ過ぎたる故に、頗る放恣に失したやうで、
 彼が心を了解するを得なんだ、で彼は彼女を楽しましむる事が少なかつた、實
 に一點の紅滴、能く以て清水を染むることが出来る、不和が一度兆したならば、
 其勢ひは滔々として、遂に止めることは出来難いであらう。
 此家庭に於て、千八百十五年の最終月も、亦將に暮れ行うとした時に、アーガス
 タ、アダは生れた、是れ詩人バイロンと、彼が夫人との形見てあつた、是時に當

つてバイロンの行爲は、益々放恣に傾き、夫人をして狂しませんかともて疑はしめたのである。

三、妻の家出と愛兒

此に於てか夫人は、赤兒アダを抱いて飄然ロンドンの地に出發した、時は維れ千八百十六年一月十五日と註せられた、嗚呼之れ何が爲めであつたか、他ではない離婚の決心があつたからである、されば彼女は遂に父の許に趣いた、彼バイロンが離婚の通知に接したのは、實に之より數日の後であつた、嗟呼、最愛の妻は、斯の良人を捨て、世は又此詩人を捨てやうとするのか。蓋し夫人が離婚の決心を固めたのは、素より夫人自身の心より出たのであらう、されどそれに就て言を添えたるものは、實にクレメント夫人であつたのである、それは彼が後にユレリツヂの一節に

あはれ彼等は若き折に友なりしかど、

さくやく舌の根に「まこと」は害はれぬ。(同上)

といふ冒頭を置くに至らしめたのでも知れるであらう、而して此離婚に關しては、ロミリー、ラシントン之二氏が處理したので、始め兩氏は、何れも开を賛成しなかつたので、種々と夫人が決心を翻ひさせうとしたけれど、其事情の止むべからざるものあるを聞くに及んで、漸くにして處理したのであつた。

四、神聖の離別

されど茲に最も奇とする處は、彼等が離婚である、記憶あれ、彼が離るゝ時は怨言を吐き、又は罵言を言ふやうな劣情を現はさなうて、却て互に愛敬を表すやうであつた事を、而して彼は夫人の徳を讃め、萬事皆己が罪であると説いた、又夫人はロンドンを出發した後、途上て良人が愛情を表する書面を送り、且つ彼を呼ぶに Dear Duck (親愛なる家鴨)なる稱を以てした、蓋しダックはその愛するものを呼ぶに用ゐられる稱呼であつて、彼等夫婦や姉のアーガスタな、んぞの間に於ては、屢々相呼ぶに此名を以てして居つたのである。

此に於て乎、彼が不事なる結婚は終りをば告げた、その不運なる家庭は、茲に等

しく悲劇の戸を閉づるに至つた、されど彼に纏へる不事と不運とは、到底彼が身邊を離れる詮もなかつた、而かも益、その勢ひを増して、彼を苦しましむるやうになつた。

嗚呼、彼が不注意、不慎密なる結婚と離婚とは、共に是れ「冥度の旅の一里塚」に過なかつたのであつた。

伊太利に於ける戀

一、戀人クララ

英國に於ける業平たるの彼れ、綠眼美髮の青年詩人たるの彼れ、多感多涙たるの彼、水上遙かに曉の殘星を望んで、天の達し難きを嘆じたる彼は、不幸に出て又不幸に去らざるべからざるをば悲むの境遇にはなつた、「チャイルド、ハロルド」第三篇を草し、「ブソツナ、オプ、チロン」を草し、次でステール夫人の盡力によつてバイロン夫人と和せんとして成らなんだ彼は、喟然「夢」を草し、「暗黒」

を草し、クララ女と親しみ、「マンフレッド」の前部を草し、終に一千八百十六年十月の天、彼れはホフハウスと相携へて、飄乎として伊太利に赴いた、而して彼の、初めクララ女と相親しむや、遂に其間に一女子が出生した、アレグラ即ち之である、彼はアレグラをば舊教の寺院に托した、然るに千八百十八年、此愛らしき少女は永眠した、幼女はその容貌頗る彼に似て居つて、その涼しき雙眸は最も彼の愛したる所であつた、さるを其俄然たる逝去は、其慈父をして斷腸の思をばなさしめたは、彼が慄然として「彼女は予よりも幸福である、彼女は逝いた」と痛嘆せしむるに至つたのでも知れるであらう、實に伊太利に於ける彼の半生は、全く失意より出た所の自棄の生活であつたが、慘報の重り至るに及んでは、益、その度を高うしたのを覺えた、此一事は彼をして永く惜むべき汚點を歴史に止めしめた、汚點とは何であるか、即ち耽り過ぎたる戀である。輕浮なる戀である。

二、戀の一變

輕跳浮薄なるクララに飽いた彼は、その戀の矢先を泊宿して居る呉服店の婦人、マリアンナ、セガチに向けた、婦人は黒き清らかなる眼を有つて居つた東洋風の美人である、彼は彼を愛することが最も深かつた、彼十有六ヶ月の間、屢書をモールに寄せて开を賞賛したのは、實に其情の如何に濃やかであつたかを證するに足るであらう、彼の一朝マリヤ熱に罹つた時に、日夜を分たて、最も介抱に力め、見るものをして其情の深きに驚かしめたるは、即ちマリアンナである、彼れマリアンナと會してより後六ヶ月、千八百十七年五月、羅馬に趣き、詩人タツソを獄に見たが、その歸るに及んで再びマリアンナと相會した、そして共にラミラに到つた、彼と彼女との交情は彌濃やかとなつたが、漸やくにして秋風梢を掃ふて、四顧蕭條の頃になると、兩人の間に於ける交情も亦、冷かなるに至つた、而して彼が愛てふ心は、斯黒眼の婦人から離れ初めた、蓋し婦人の性質は餘り過激に失して、普通のメートルを以て測り難いやうなる行爲が少なくなかつた、彼が與へたる寶石を故なく賣り、又はその從妹を打擲したな

どは、彼をして倦かしめたる素となつたのである、斯くて兩人は相離るゝに至つた。

三、戀の再變

マリアンナに次で彼の愛を博したる婦人は、マーガリタ、ユグニであつた、彼女はバン屋の妻であつた、而して其風丰は、丁度黒髮のジュン女神を見るやうで、その麗姿は直に彼をして戀の虜とは爲し了つた、當時彼は貧民を恤み、慈善の爲めに力を注いで居つた所であつたが、マーガリタと相親むやうに至つたのも此緣故である、されど兩人の愛は永く保つことが出来なかつた、彼等はグラント、カナルの一郎に住んで居つたが、暫時にして彼は彼女に退去を命ずるに至つた、其の原因はマリアンナと同じやうなる過激の性であつたからなのだ、或る日彼等は水上に遊んで、風雨に逢ふた時に、マーガリタが狂女のやうになつて、船頭を叱つた事があるのと、次は其激憤した時に、身を水中に投じて死意あるを示したとに依るのであつた。

四、戀の三遷

マーガリタに次で彼と相親しんだは、ギツチヨリー伯爵夫人である、その愛は互に眞情を以て持し、誠意を以て共に許し、寸暇も互に其愛の心を變じた事はなかつた、而して此愛は全く前の二人とは同一のもてはなかつたのである、一千八百十八年の秋、アルプリジー夫人招待會の席上伯爵夫人を見たのが、抑も始めてであつたが、而も未だ此時は、互に知るを得ななだが、翌年の四月、ベソニ伯爵夫人の宴會に列席して、茲に始めて言語を交ふる事が出来たが、一見意氣相投じて、殆んど舊識のやうであつた、夫人は十九世紀の始め、位高くして家資裕でない、ガムバ伯爵の娘として生れ、十七歳の春を迎へた時に、六十歳のギツチヨリー老伯に嫁した、夫人は性文學を好んで、多くの書を愛讀した故に、詩人としての彼と相會して、意氣相投じたのも亦不思議な次第ではない、彼れ詩オダンテを論ずれば、夫人又舊教を説き、而して日を逐ふに従つて、其情は泌み、恰も兄妹に似たやうな風であつた、然るに何ぞ知らん、此間徐ろに眷

戀の情は養はれて、遂に離れ難いやうに到らうとは。

夫人の伯と共にラベンナに赴いた時、途次屢々書を彼の下に寄せ、其後を追ふて來遊されんことを勤めた、彼も亦ダンテの遺蹟を見やうとする志があつた、夫れ故に其勤めに従つて同地に向つて出發したが、着するに及んで住民は盛んに「英國の男爵詩人が來る」と噂をした、偶々伯の夫人は病の床に臥して在つたが、旅窓無聊に苦んで居た、老伯は依つてバイロンに請ふに、夫人が病牀に來つて开を慰められんことを以てした、バイロン往く、是に於てか二人の交情は愈、固くなつた、彼がラベンナの地に在つた時は、貧民救助に力を盡して大に衆人の尊敬を受けたが、又作詩にあつては「ダンテの豫言」なんぞを以て著名なるものとする、後伯爵夫婦のボロナに向ふや、彼も亦往つた、彼は又老伯の承諾を得て、夫人と共にベニスに行つたが、それから更にラベンナに歸つた、一千八百十九年の末、彼は夫人の住んで居る、老伯の邸内に泊つたが、その後此所に滞まつた事一ケ年、シエレーなんぞは、度、彼を此邸に訪ふた事が

ある、而も夫人と彼との關係は益々深きを加へるのみであつた故に、結局老伯との離縁を見ないては止まなかつた。

之を要するのに、彼が失戀から出てたる自棄は、終に戀愛に妄耽するの汚行とはなつたのである、されど彼のポロナに在つた時には、賞讃すべき偉功又少しとは言へない。

最後の戀と其末路

一、愛は軽く義は重し

彼が伊太利に於てなされたる戀は、以上の分に止まらない、そしてその一面に於ては、彼は獨得の健等を振ふて、伊國獨立の氣象及び、自由の精神を奨勵した、唯に筆のみを以て満足しなかつた彼は、獨立黨の熱心なるものを集め、武器を準備して機の到るを待つて居つた、然るに千八百二十一年二月、「大策破る」との報は、迅然として彼の耳邊に達した、此結果として彼は轉々ピッサに赴き、居る

こと十有一ヶ月、更らにゼノアに向つた、その間彼はレイ、ハントと共に「自由」なる雑誌を發刊し、或はバイロン夫人と和せりと試み、ツレラウニーと親み、メドヴィンと相知つた、而してフレンシントン夫人と親交を結んだ如きは、その最も名高いものである、彼のピッサより、ゼノアに到る間は、一刻も故郷の事を忘れなかつた、彼はバイロン夫人を忘れられなかつた、その愛を温むる事は敗れたとはいふものゝ、然も彼は斷然その希望を捨つる事が出来なかつた、況してやセバルド夫人の祈禱、少女アダの成長、フレンシントン夫人の盡力等は、最も彼が衷心をば刺激して、痛恨に堪えざらしめたのである、フレンシントン夫人は、彼等夫婦が復舊を以て、相互の幸福を圖らうと勉め、少女アダは六歳となつた、その成長と消息とに關しては、異母姉アীগスタの手から傳へらるゝ毎に、如何許り彼が胸裡に感じたか、想を西北の空に馳せまいと思ても能はなかつた、加ふるに彼はバイロン夫人の自筆の文と、愛兒アダの細髪を手にするや、歸英の心は勃々として禁じ難きに至つた、されど彼が足再び英國の土を踏ま

ず、落花遂に枝に返らず、彼の希望は春の野の夢とは消え了つた、そしてバイロン夫人は嫗婦として生を送り、アダは父なき娘となつて、世の不幸を一身に負ふた、然も古來武名赫々たるバイロン男爵の家は、後年彼が從弟に當るジョージ、バイロンの手に依て、僅に支へらるゝの末路を残した。

二、義軍の陣中に永眠す

由來偉人の末路は賞すべき活歴が多いが、吾人は詩人としての彼が、その末路に於て、三軍に將たる壯舉を演じたるのに敬服せざるを得ない、然して伊太利に於ける彼が生活の終りは、實に男爵詩人が終りであつたのである、而して茲に詩人としての一段落を告げた彼は、更に永く其の芳名を歴史に止むるの榮譽を博した。

抑も十九世紀の初めに當つて歐洲の天地に一大光榮ある自由獨立の勝利を尋ねたならば、何人も希臘戰爭を以て答へるであらう、然も此光榮こそ、最後の舞臺に於ける活劇であつた。

一千八百二十一年四月、正義と愛國との赤心燃えたる希臘人は、土國の酷政を慷慨し、遂に獨立の義軍を起した、开を見たる世は、奮然身を挺して之を助けた、時は維れ一千八百二十三年七月、而して詩人として世に認められた彼は、二門の大砲と、五頭の馬と、西班牙貨幣五萬弗とを齎したのである、翌一月五日彼のメソロンギに着するや、國民の喜聲湧くが如く、軍隊は祝砲を放ち、総督は出て迎へ、西部希臘の名士は、彼が來援を慶賀した、之より彼が身邊には、常に五百の護衛兵を置かれ、詩人は茲にコムマンダ、イン、チーフ(總督の稱)とは尊重せられた、而かも文筆を投して劍戟の間に立つた彼は、剛毅堂々、脱然として俗流に秀でた、そのレバンタを攻むるの任に當つた時などは、英氣凜々として、恰も古武將たるが如き有様であつた、加ふるに部下を支配するに規制嚴格、衆望一に彼に歸し、又彼の爲めに死を顧みないやうであつた、實に彼は希臘のために汲々としてその獨立に盡す處があつたが、僅に此所に在る事九ヶ月にして、死の神の冷かなる手は、此義勇の賓將をば、遠き國に奪ふて、惜い哉再び

戻さなかつた。

彼が陣中僂麻質斯性熱病に罹つて病牀に臥すや、言語彼と相通ぜる希臘の人々は、誠意を眼底の涙に示して、晝となく、夜となく、熱心に彼を看守つた。されど彼が容態は、日一日と此世に遠ざかつた。そこで義といふものゝ外に、又一身のあるを忘れたる彼は、その失神の間にあつても、尙ほ戰場にあるが如く「進め！、進め！」と叫んで居つた。そして其死する前一刻、彼は慨然として「余は余の時と、余の健康と、余の處得とを與へた、されば今や我生命を與ふ、憐なる希臘國よ、猶何をしやう乎」と、千八百二十四年四月十九日、彼は遂に逝去した。時に年三十有七歳、彼が逝去の悲電陣中に傳はるや、痛哭の聲は山野に満ち、三十七發の吊砲は、マプロコルタトスの命によりて希軍の中に放たれた。（以上眞

氏バイロン参照）

吁、大詩人……大義傑バイロンは逝いた、希臘の民はその遺骸をアゼンの都に葬むつて、永く此義人が冥福を祈らうとしたが、彼の希望に據つて英國へと

送られ、ハクチル寺院の祖先の墓なる樹陰に葬られた。彼死後六年、歐洲は希臘の獨立を承認し、茲に義人が遺志は始めて成功した。英國ハミルトン公園の一邊にある、希臘政府寄贈の赤色大理石の碑像は、訪ふ人をして徐ろに當年の詩人、バイロン男爵の高風をば偲ばしむるのである。

獨逸文豪

戀のシルレル

幼時の思想

少年詩人

獨國ウルテンベルグの片ほとり、ロルク村に接して、嚴めしき古城が立てられ
 である、其蒼然たる古色は昔を忍ばせて、石壁の色の黒みたる跡とに残り、見
 上る計りの高樓は、幾世紀かの風雨に堪へたる秘密を示し、巍々として直にも
 半空に入るやうで、遠く之を望んだならば、雲間より生へたる天の御柱のやう
 に見え、近く之を仰げば、俊乎として古傑の昔を語るに似て居る、开が下を行き
 來う旅人は、城頭を射る夕陽に、逝きにし偉人が跡を忍び、心なき野老は又た
 怪しげなる田舎歌を謡ふて居る、されど古城はもの言はず、而も超然として浮
 世の光景を笑ふが如くにさも似てこそ居る、その邊を流る、レムスの河は、
 見事なる葡萄の園を廻りて、豊饒なる田と圃とを縫ふて、緩かに迂折し、樂し
 げなる水の歌は、餌に飽きて自然を讚美する鳩の聲に伴ひ、銀のやうなる一條

の細流は、遠く近く、葦と菜の花との間から、幽かに認められる。吁、此古城趾こそ、獨逸一世の大詩人として、光榮を永く歴史に留めたる、ヨハン、クリストッフ、フリードリッヒ、シルレルの故郷である。

シルレルは、西曆一千七百五十九年十一月十一日を以て生れた、父は軍醫の職を奉じて居つた人で、その名をヨハン、カスバル、シルレルと呼んだ、母はマルバクの産のもので、エリツアベス、ドロテア、ユドウライスと稱せられた。

彼は幼時父母が教訓の下にあつて、その感化を受くるや、此可憐なる兒童が少なき胸には、既に聖教の爲めに一身を献じやうとの念を生じ、且つ彼が屢々耳にした詩歌は、早くも己に抜く可からざる性格を其の心に植へて、實に將來詩人たらんところは望ましめた、彼は夙に天然の美を愛し、卉を熱嗜する好奇心は、何時しか彼を天然に誘ひ、彼の山と、此の水と、涼しき月と、少なき星と、而して麗しき空の色は、凡て無言の中に優さしき教育をば加へたのである、而も彼が優に寛しく、又感情に強かつたは、頗る慈善の心に富ましめた、幼なき彼

は、其の學校に上るの途上、若しも憐れなる少女に遇ふことあれば、その物言ふが如き清らかなる眼は、常に優しき露を含んで、彼は彼が手に持てる總ての書籍を與へずしては満足しなかつた、此優美なる心情と、天然の渴愛とを有つて居つた彼は、又將に詩人たらんとして、美の愛を好むに至つた。

彼は今迄手にしたる鞠を抛つて、樹蔭に逍遙するを好み出した、そして彼が眉宇には、一種憂鬱の色現はれ、彼は現在の我身が、如何に可憐なるものであるかを想ひ、將來の希望と云へる思想は、その心に萌え出した。

彼は乃ち人界を脱れて天然に走つた、彼は幽瞑なる運命の疑路に彷徨ひつゝ、古城斷墟の落日、梢に歌ふ鳥の聲、水の面に躍る魚の、風私語く麥畝の青蕪、此等は皆彼が心を慰むるもの、一つとなつた、彼は山野を逍遙して自然の音楽を耳にした、彼は歩を戶外にしては雲雀の夢を驚かし、露に息ふ胡蝶を追ふた、而して彼は日又一日、その思想を深めて天然を愛する人とはなつた。

然るに計らざる革命は來つた、天外より此可憐なる小詩人が頭の上に向つて、

彼は未だ詩人たらざるに、意外なる事情は意外なる天地に、彼を拉し去つたのである。天然の美を愛した彼は、父が恩顧のカール公爵が要求に従はされて、武斷的教育を授けらるゝことゝはなつたのである。哀れなる彼は、茲に恰も秋霜の威に打たれたる枯蒿の、吹く嵐に落ち散りて地上に眠るが如く、暫くその希望を冷土に埋葬せんとは覺悟した、哀れ彼が櫻花の如き空想は、一夜庭後の土と成り了つたが、彼が痛恨何ぞ此所に盡き了らうや、彼は自然の美と文學の書とを見て嬉ぶを禁ぜられた、されど开を得んとするの願望は先より一層強まつたのである。

熱愛の戀人

理想の戀

盖し秘密は人の殊更ら聞かんと欲するもので、美しくしき林檎はアダム、エアの禁を犯したものである、彼が學窓に於て文學の書籍を嚴禁せられたは、却つて彼が開を得んと欲する希望を高むるのみであつた、如何なる堅固の城塞も、到

底人の熱心を杜絶せしむることが出来るものではない、彼は今や大吉の園に於けるアダム、エアの如く、その禁を破つて、竊に彼が熱愛の戀人、詩歌の君とは契り始めた。

彼が熱愛したる此戀人は、彼を如何なる域に招いたか、彼は先づシエクスピア、ブルタークを讀み、又ゲーテの「ゲーツ、フロンベルリヒンゲン」を玩誦した、彼が後に文壇に名を響かせたのは、實は此戀の賜であらう、彼は如何にしても、到底武斷的教育の下に、犠牲となるに堪へ能はなかつた、彼は義務といへる名稱の下に、此戀人と離るゝ事は忍びなかつた、而して此戀人の賜として、彼は「盜賊」を著はすに至つた、然も此戯曲や彼が處女作であつたのである。

「盜賊」の一篇は、是れ則ち彼が理想の心闘の活歴史である、高き理想と低き理想の世界との衝突史である、その戯曲中の女性アマリアは美妙なものであつたが、惜むらくは空想に走つて、現世の人物ではなかつた、彼女がその戀を述懐した所などは、實に熱情に富み過て居たものであつた、今その一節を摘記す

れば、

「彼れ動搖する海を航すれば、アマリアの戀は、彼と共に海を航す、(彼とは戯曲中のモールといへる男を指す)彼れ道なき沙漠を彷徨すれば、アマリアの戀は、彼の足下に燃ゆる砂土を綠色となし、短かき灌木に花を咲かせる、日光は彼の裸頭を焦がし、北方の積雪は其の足を埋め、烈しき霰は、その顛顛を打つ、されどアマリアの戀は、暴風の間にも眠らせんがために、彼を靜平ならしめる、海と丘と、地平線とは、我等を鎖した、されど我等の心は、此の土の囚牢を脱けて、かの戀愛の樂園に相逢ふのである。」

と、而して此曲の世に出るや、獨り獨逸の文壇を震動せしめた計りてなく、餘音は延いて全歐の山河に反響したるものは、でも如何なる所以であるか、他なし、戯曲の第一なる秘訣たる活潑なる感情の中に於て、讀者を引着したからである、而して此作の爲めに、當時某貴族の子にして、才能ある青年があつたが、名門を棄て、深林に遁れ、「盜賊」を抄録しつゝ、遂に發狂したと、又或る青年は、此

戯曲に感激して、最も恥づべきの死を遂げたと、以て此著の如何に人心を支配した處の力があつたかを、知ることが出来るであらう。

最初の愛と其失戀

その謠ひし歌

「盜賊」の戯曲を出して、嶄然文界に頭を擡げたる彼れ、年少詩人の名を以て知られたる彼は、當時尙ほ未だ極めて寂寞たる生活をして居つたのである、彼は同窓の友、カッフと小き家の一室を借りて自炊をして居つた、而してカッフは、放逸なる青年であつて、此頃屢々彼を誘ふて迷はしめやうとした、されど彼が文學に誇負する自尊心と、或る秘密なる優しき手は、彼が此暗黒なる世界に陥るを救ふて、更らに光明の域に至らしめたのである、而も此秘密の手とは何か？、即ち戀であつた、當時彼が住んで居つた家に、或る寡婦が同居して居つた、然るに少壯多血のシルレルは、此寡婦に向つて何時しか熱き情念をば打運んだ、されど彼は、到底その戀を棄てなければならなかつたのである、彼女は名をロ

ローラと云ふた、而して此ローラこそ、彼が情に於て溢れたる、愛の詩の總ての題目となつたのを知つたならば、如何に彼が當時に在つて、彼女を思ふて居つた事の深かつたかを認め得るであらう、さるに果然基礎の定まらなかつた青年白面の詩人は、遂にその第一の戀に於て破れて了つた、彼れに親切でなかつた或る友は、告げて言ふのに、「シルレルの慕ふて居つた、ローラは、さほどの美人でも亦才婦でもなかつたが、唯だ何ともなしに、人を愛着させるやうなる性質を有つて居つた」といふた、故に彼が戀は、普通に意味するやうな、ブレトリーの戀ではなかつた、吾人が實にパーンスに於て、戀愛を意味するやうな純粹なるものであつたのであらう、彼れローラを歌ふて言ふた、愛の歌に、

オー、ローラよ、
なが影の、

我眼の前に、
光るとき、

われは世界の、
その上に、

翔け舞ふ如く、
思ふなり、

五月の闇の、
雲間より、

泄るゝ光と、
感ずなり、

なれが瞳に、
わが影の、

映りさしにし、
その時は、

われは御空の、
精氣をば、

呼吸す如く、
覺ゆなり、

玉を轉ばす、
琴の音は、

清く響きて、
最とたへに、

遠く遙かの、
御空より、

來るが如く、
覺ゆなり、

燃るが如き、
なか唇の、

涼しき樂を、
奏づれば、

縷々たる餘韻、
わが耳に、

満ちて慕ふる、我が胸に、
なれが聲音の、美しく、

牧者の涯に、さも似たり。 (全 上)

と、而して一度、その戀の破れて又如何ともすることの能はずなるや、彼は即ち
惘然として謠ひ、以て其の痛感を慰めた、その悲惨なる失戀の歌に、

アー、ローラよ、なが顔は、

荆ある薔薇に、さも似たり、

呪咀を投ず、悪風の、

寒は満ちたる、なが頬を、

噛みてぞこそは、往き去りぬ、

悲しき雲は、そが後へ、

空を暗めて、湧いて來ぬ、

盛の春の、かんばせは、

また見ん術も、なかりけり、

空しく茲に、了ふるらん、

愛の心も、戀衣も、

美麗の想も、今ははた、

何所の空に、消えしやら、

跡をも止めず、なりにけり、

戀しき人は、既に無し、

今は誰をか、愛すべき、 (全 上)

と、彼は實に此戀の破壊をば、「傷ましき犠牲である」と語つて居つたのである、
されど彼は此戀よりも大なるものを有して居つた、开は何であるか、彼が今夢
見つゝある希望であつた。

漂泊時代の戀

一 シルレルの出奔

一千七百八十二年一月十三日、彼が處女作なる「盜賊」は、遂にマンハイムの劇場に於て演ぜられた、而もその賞呼の高くして四方の観客を奮起せしめたる感情の餘波は、彼をして卓然たる偉大の抱負を興さしめた、彼は其の成功に據り全く勝利を得た、此勝利を得たる彼は、更に「フリースユ」の悲劇を志し、西班牙のドン・カロス^①を劇曲にて編まうと思立つた、阜上三年飛ばなかつた鳥、飛ばば人を驚るかさうとする彼は、既に飛んだ、飛ば、何して人を驚かさずに居やうか、彼はマイハイムに往いて、「盜賊」の劇を見た、劇は興行十四日に亘つたが、人民の激昂殊更甚だしかつたので、危険は彼が身を襲はうとした、彼は今や殆んど執權者の怒に觸れて、八年の囚牢を招いたる、詩人シュバルトを繰返すべきものゝやうに相成つた、此に於てか彼は、永くスツットガートに其の膝を屈するを好まうや、彼は已が獨立の生計の爲めに、運命を世界の市場に決しやうと欲して、飄然此所を去つて了つた、その時に於ける彼が落魄は蓋し憐むべ

きものであつた、父と朋友とは、同情なき顔を以て冷かに彼を見た、彼は囊中一錢の蓄へなく、加ふるにその前途は、漠々たるこの希望のみであつた。此憐むべき不幸の日は何時ぞ、實に一千七百八十二年十月、梢の葉は色づいて、四方の山々は龍田の姫の織りなせる、錦の衣を纏ひ初めたる頃であつた、時に彼年齒正に二十を越せしこと三歳、情餘り、感溢るゝ時の日記は、長へに其の如何に悲痛なりしかを、筆に留めて居る、今茲に其の出奔の眞想を記すであらう。

彼は其の出奔に先ち、スツライケルと呼ぶ、同窓の友を得た、彼等は竊に關山萬里の志を懷いた、偶々機會は流星の如く天の一方から落ち來つた、恰も此時スツットガートの市民は、或る外國の公爵が歡迎に急がしく、市中はさながら潮の湧くが如くであつた、彼等は此混雜にまぎれて出奔しやうとした、而して之を知つて居つたものは、彼の妹と其の母とのみであつた、實に彼は父に知られざるの間に於て、出奔せんと企てたのである、彼は凡ての最後に、父の家を

訪ふた、時に父は家に居らなんだか、母は彼が爲めに數刻の涙を盡した、彼は涙を以て之に對へた、彼の眼は赤く膨れ上りて、その双の頬には熱涙の痕を残した、彼等母子が袂別の悲痛は如何計りてあつたらうか、準備は已に出來た、スツットガートに見る最後の夕陽は、名残なく沈んで、冷かなる夜の神は、何所よりとなく舞ひ來つた、名残は盡きじ、いざさらばと、彼等は旅装を整へた、携ふる所の囊中又幾干を有したか、此時シルレルは、天にも地にも僅に二十三フロリンの金を有して居つたのみであつた、彼等は同夜の午后十時を以て、スツタイケルの宿を出てた、車は二人を乗せてエスリンゲンの門に向ふた、夜色凄暗、その何人たるかを辨ぜなかつた、されば知人であつた門衛の人は、彼等を誰何した、聲は暗中より出て、二人に何所へ行くかを尋ねた、答ふる聲は同じく暗中に響いて、「博士リーテル、博士ウナルフ、共にエスリンゲンに行くのである」と、先きの暗中の聲は再び闇を破りて「ヨシ、行け………」

虎口を逃れて彼等は漸く奔つた、一步は一步より、一行は一行より、親しき父

母が家は遠ざかつた、シルレルは顧みて、その家の方を指し、沈吟殆んど去る能はなかつたが、聽て、感情最も深き一語は、彼の唇を衝いて出た、「オ、我母」

“O Meine Mutter”

と、叫んだ一語は短かくして、その韻や長かつた。

郷を背にしてより後幾日、辛苦と漂泊を忍んだる彼は、途上此悲慘の運命を共にしたるスツタイテルと相分るゝこととなつた、彼等は相抱いて互に血涙に咽んだ、是よりシルレルは、唯一人憐れなる旅客となつた。

二、冷かなる戀

哀れなる秋も何時しか過ぎて、今は寂びしき冬とはなつた、時しも可憐なる一人の青年旅客の、ポーエルバックに入り來つたる者があつた、その顔は旅の疲れに寒つれ、蒼く凄みを帯びて白く見へた、吁、ヘンチベルグの城趾を、霜枯の野橋に回顧し、風冷かなる寒村、荒舎を積雪の途上に悲み、孤影飄然として失ふ處あるかのやうである、その辿り來るや、冬は將に天地を抱いて、山河は其の

懷に睡つて居る、彼を迎ふるものは、唯僅に寒むく流るゝ水と、蕭殺たる枯梢とある計りである、彼は追はれた迷兒のやうに、知る人とてもあらがねの、その自然の間に彷徨ふ人とはなつた、此可憐なる旅人は麼も誰か、之れ漂泊の詩人シルレルである、彼は我が清き理想を抱いて、長く無聲の天地に高縦せんのみと、詩歌は即ち我が爲めの戀人なりと、又俗塵の一指を觸るを好まなんだ、彼が理想は冷かであつたのである。

然るに此寂寞を破つて、親切なる寡婦ウナルツナゲン女史は彼を見舞ふた、女史は可憐なる少娘を伴ふたが、彼名はシャイロツテと呼ばれた、シルレルは此小娘に依て、亡きローラを思ひ出した、されば彼女が訪問は、却て彼が回舊の情を熾ならしむる計りであつて、彼女は彼が沈鬱せる感情を救ひ能はなかつた、シャイロツテは、其戀情を起さしめ能はぬのだ、蓋し前きの失戀を忍びにし彼は、今や雪の窓より社會を見たるやうな、冷かなる戀の眼を以て、嬢を見たのであつた、ローラを見た時に於けるやうな熱情の眼は、シャイロツテを見た時の

眼ではなかつたのである、翼を擴げ、矢を番がふキエビットは、偽りなる戀の神である、眞個のエロスは、先に翼を收め、弓を折られた、シルレルの戀は、寧ろエロスの戀であつたのである、彼は曾てその弓を折られた、されば容易に復た張られなかつたのであつた、彼は悲しき心中を歌ふて、

如何に我等の哀れなる、

樂しき世をば失しけり、

如何に我等の憐れなる、

君(ロイフ)と我とは離れたり、

されど我等は冷め得ざる、

熱き情を有てるなり、

庶幾くは大神よ、

我が戀愛を復た見せよ、

散りにし花は咲出て、

樂しき世をば復た見せよ、

されば我身は亡き君を、

樂しみとせん悲しむを、

神よ我身を顧みて、

接吻を長く得せしめよ。

(同上)

と、彼がローラを思ふの情は、此時に於ても亦、如斯であつたのである、さればウナルツオゲン女史が親切も、シャーロットの笑顔も、遂に冷かなる彼が胸に、戀の焰を起さしめ能はなかつた、然るに何ぞ知らん、自ら戀に冷かであつたシルレルは、自らシャーロットに向つて、熱き愛の情を寄せるの人とならうとは。

吁、圖るべからざるは戀の變化であることよ！。

戀の變遷

一、再度の戀と破戀

彼はローラに戀ふて破れたる後、その心に戀てふものは果敢なきなりと刻まれた、さればシャーロットに於ては、冷かなる心を以て見たが、其の作「奸謀の戀」の劇場に上ることとなるや、世人は喝采を以て之を迎へ、彼れを知らざる貴顯紳士は、彼に向つて丁寧なる祝詞を寄せ、又彼を見たることに無い美しき令嬢は、その佳作を賞して彼に顔料をば贈つた、此名聲赫々たる時に於て、彼が理想の情思は、岩際より垂れ下る藤の花の如く、其理想を反映すべき女性に向ふた、彼は今や嘗て其の冷かなる戀の心に於て、ポーエルバクの松林を散歩したる時代を回想し、冷かに看過したるシャーロット嬢を顧思するに至つた、彼が現に見たる嬢の影は、實に彼を引着けやうとするのである、されども嬢に對したる彼は、嬢の外他をしてチャームなく、意味なきものと成らせる活きた美の婦人としてではなく、理想の女神エゲリアに對するやうであつたのである、されば彼は言ふた、

「吾人と喜憂を分かち、吾人と愛情を合し、吾人の心を慰藉する婦人と一體たり、其胸に吾人の精神の安息を需むるは、幾多の心痛、幾多の放縱なる願慾、規律なき感性より救はるゝ所以にして、家庭の平和なる愉樂は、運命の酸辛を驅逐す、嗚呼之れ人生眞の清福に非ずや」 (同上)

と彼は此に於て、遂にシャーロットに向つて結婚を申込んだ、是れ彼が第二の戀の經驗であつて、而して又その戀は失敗であつたのである、彼が戀の復活は破れた。

二、第三の戀も破れたり

彼は再度の戀人シャーロットの、遂に望なきを知るに及んだので、其燃るが如き情は、更にマルガレットに轉じた、マルガレットは、彼が「フリースコ」の原稿を買ふた書店の主人シュワンの娘であつた、彼女は涼しき眼と、美麗なる容貌と、而して伶俐なる才能とを有して居る、芳紀方に十有九歳の紅顔花の如き少女であつた、初めシルレルは彼女の父と相識れるを以て、次て又彼女と言葉

を交うるやうに至つた、そして一千七百八十四年の秋の頃になつては、彼女は全くシエレーの心を認めた。

彼は此新らしき戀に於て、更に新らたなる戯曲を稿した、彼がマルガレットに對する感情は、不幸なる「ドン・カロス」の感情となりて、其の文句の間にこそは燃へた、されど彼は未だ其の戀と、戯曲を發表するに及ばずして、マンハイムを去らなければならざることとはなつた、彼は此時に當つてマンハイムを見舞うたウワイマル公爵の謁見を許され、其の議員としてライブシツヒに招待せらるゝに至つた。

彼はライブシツヒの一隅に、紙を展べて筆を叱咤した時、彼は其の戀人に對して如何なる情懷を保つたか、彼は書をシュワンに送つて其の娘を得やうとした。

「予が貴下の家族に對する自由にして制限なき接近は、予をして貴下の最愛なる令嬢の親密なる交際を忝ふするを得さしめ、又貴下と令嬢との親切な

る厚遇は、予をして貴下の婿たらんとの大膽なる願望を生ぜしめたり、從來予の経途は茫漠たりしと雖、今や幸に喜運に向ひつゝあり、予は標的の明了なる時、更に不斷の勇氣を鼓舞して運命を開拓すべし、貴下は予が最愛なる人の、予の熱心を補助するに足れば、予が其標的に達し得べきをも信じ得ざるや、猶二年にして予の運命は決定すべし、ウワイマル公は予が予の秘密を開陳したる第一なり、公の豫察予が幸福の爲めに盡す處あらんとの語は、予をして予の幸福は貴下の令嬢と一躰たるにあるを懺悔せしめたり、公は予の撰擇に満足を表せり、予にして若し此合躰に依て幸福を全ふし得るに至れば、公は更に予の爲めに盡す處あるべし、予は多言せざるべし、予は予が目下貴下の令嬢に向つて約束し得るものに比して、他の幾百の人の更に富裕なる運命を以てし得べきを知る、然れども幾百人の誠心は、果して令嬢に向つて價值あるものなるや否や、予は敢て否定せざるべからず。 (同上)

彼は實に斯の如く彼女の父にまで言ひ送つた、されどシユワンはどこ迄も書

賈である、何程親に親切であつたとて、彼は到底シルレルが天才に向つて充分なる信任を置くものではなかつたのである、シユワンは不規則であつて、一定まれる業とても無き文學者は、常に黒バンを嚙りつゝ窮居して居るものであると認められたが故に、斯の如き人に我娘の一生を托するはよろしからずとなして、マルガレットを彼に與へることを肯ぜなかつた、そして其の女マルガレットは、到底彼と一躰たるに不適合なる性質のものであるとて、彼に送つたる返書には、此好遁辭を載せた、嗚呼、三度燃え出したる彼が戀は、果然又茲に破れて了つた。

此に於てか彼は猛然として、彼女との關係を斷つた、されど彼と彼女との間には殆んど絶つ事の能はない愛情の鎖は結ばれて、彼は其の戀を斷つに於ては全く勇者であつたが、彼は如何にしても彼女を忘るゝことが出来るものではなかつた、而して彼女も此時からして憂愁の人とはなり了つた。

彼の戀は三度破れた、されど彼が戀は最初より戀愛の思想が甚だ高かつた、彼

を知れるものは、總じて高尚であつて、丈夫らしき人のやうに、彼は永く其の柔軟なる感情に依て、鼓動せられたる愛の記憶を存して居る、然も此戀愛の記憶は、常に彼を感激したけれども、彼は決して开を容易に口外することはし爲かつた、彼の戀は常に熱心にして嚴肅なるものであつた、浮誇の小兒的感情では無くつて、最も神聖なるものであつた」と、如斯に彼が戀は莊重のものであつたのである。

三、第四の戀人

第三の戀に於て破れたる彼は、其の失戀の記憶を忘れやうとしてドレスデンへと赴いた、彼が當時の生涯は實に喜悲交々錯つたのであつた、彼が失戀の記憶は、彼をして幽靈の如く沈ましめ、而して寂寞の愛は猶ほその幼時に於けるが如く大きかつた故に、彼が歡喜痛悲の希望は、靜まる時なき生涯を脱して來り、渾然として俗塵を離れたる天然の樂みてあつた、されど开は外部に現はれたる彼が行爲であつて、その胸裡を探つたならば、恐らくはドレスデンの生涯

の如く、彼に痛激なるものはなかつたであらう、彼は此地に於て第四の戀人に思ひを燃やした、开は誰か、即ちユリア嬢である、然も此戀の結果は、殆んど彼が平生をして沈着を失はしめたのである、さても其の戀の眞況やいかに。彼の此地に來るや、ソフ井、アルフレットと呼ぶ、當時有名なる女優と相識つた、そして一夕優を訪ふて其の家に赴くや、彼は非常なる感激に遭遇したのである、开は何故か、彼は其の家に於て、緑の眼いと涼しき、艶姿最も可憐なる少女を垣間見たのである、此少女の名はユリアと云ふた、偶々その母と共にドレスデンに來つて、女優の家に寓して居つたのである、彼等は素と僅少なる養老金に依て生活して居る者ではあるが、而も此の類稀なる少女の艶姿は、充分に多情詩人を戀着せしむる程の魔力を有して居つた、されば彼は大に彼女を愛した、そして开を得やうが爲に交誼を求むるに切であつたので、狡獪なる彼女の母は、早くも之を見て兩者の間に周旋し、彼が如き知名の詩人に依りて、嬢の名聲を釣らうと思ひ、互に慇懃を通づるをば得せしめたのである、故にシル

レルの彼女に對する戀情の熱心だつたことは、其「ゴースト、ジール」の中にユリアをして不朽ならしめた程であつたけれども、彼女はさまでも感激せる様子にはなかつた、實に彼女の眼に映つたるシルレルは、蓋し彼の眼に映つたる少女のやうではなかつたのであつたのだ。

四、彼が風貌と容姿

想ふに此詩人が風貌は、その成長と共に漸く其の美を失ふたやうである、その金總に飾られたる幼き時の容貌を形容として、彼等の姉妹が「天使の肖像」に似て居ると言ふたのを見ても、その幼時美しくしき少年であつた事は知ることが出来る、けれども當時に於ける彼は此美しくしき姿ではなかつたのである、彼は肉瘠せて、鼻柱が高く、身丈傀偉の人であつた、故に女優などの容姿を見て美であると思ふが如きもの、眼には、彼が風丰は決して美しきものでは無かつたのである、されど又彼は他の滔々者流に於て容易に發見し能はない高尚の風采を備へて居つた、其の顔色は蒼味を帯びた白色であつて、頬は稍々凹み、

髪は毛は房々として其肩に垂れ、而して暗褐色の波を打たせて居つた、其額は前の方に降起して、一見彼の凡人でないといふことを證明し、側面より彼を見たならば、俊然たる梁骨顛顛の邊に縮少し、方にその果斷と勇氣に富んで居るといふことを示して居る、その清らかなる瞳は潤味ありて彩華を含み、一言にして其の形容を總稱すれば、彼が容貌はその性格と一致したるものであつて、而かも彼が外貌と内情とは、高尚の化身であつたのである。

五、第四の戀も亦破る

彼は容貌に於ては決して悪しきものではなかつたが、然し當時に於けるシルレルは、其の肖像の吾人を神碎せしむるが如く、能く少女を感動し能はなかつた、されば少女ユリアは唯彼等女優に似合はしき眼を以て彼を見た、而して彼は又その常服には寧ろ甚だ無頓着なるものであつた、其の故に彼女は彼が灰色に變つたる外套を見、又その風丰の傀偉であると、その舉動に傲慢と、沈鬱の色あるを見、彼が嗅する西班牙煙草の鼻邊を逸する外は、又何ものも見能は

なかつた、然もその見能はなかつた中に、必ずや塵外の消息を垂れんとする最も高尚の風丰のあるのを知らなかつたのであつた、若し彼女にして、一度此高韻あるを知つたならば、且つシルレルの眞價を知つたならば、情人は果敢なき戀を見ざるべく、彼も亦た大詩人の妻たるを得たであらうが、惜い哉、彼とユリアとの戀は成就しなかつた。

ユリアが獨りシルレルを熟知し能はなかつた計りてなく、彼の朋友は皆其ユリアとの關係を以て、徒に彼れが名譽を損するものであると做し、種々なる手段を盡して両者が間の戀情をば疎隔ならしめやうと力めた、此に於てかシルレルは、四度その戀に於て失敗して了つたのである。

六、第五の戀人

彼が第四の戀は破れた、彼はユリアを思ふの念を忘れやうとして、ウワイマルに赴いた、蓋し此地は歐洲の亞善である、文人星の如く集り、加ふるにアマリア公爵夫人は、優美清楚の質を以て之に盡した、されば天上の月の如き斯の夫

は、幾多明星を此地に集めた。

楊柳水に垂れて影靜かなる處、イルム河畔天は今將に一の理想國を開かうとした、ウワイマルの文人世界即ち之である。

ライプシツヒは既に失戀の記憶を彫つた、而してドレスデンと共に、彼が忌むべき天地とは成つたのである、而も此時に於て彼は忽然として、ウワイマルの別天地に入つた、是れ實に蝶を追ふて花園に到つたのである、彼はウワイマルに赴いて後數月、ポージェルバクに行つた、并は彼が記憶すべき恩人ウナルツナゲン女の招きに従ふたのである、彼は此地を見るや、昔の悲境を追想した、鬱蒼たる森林は依然として梢を並べ、寥寞たる山川は依然として存するけれども、今日のポージェルバクは、昔日のポージェルバクではなかつた、長途の旅に疲れたる彼を惱ました雪と風は、今は何處へか行つたの乎、時は小春十月の天、宇宙は王城の如く、大地は聖壇のやうである、宛然是れ實に一幅の活畫圖に似て居つた、而して此行や更に彼をして最と大なる賜をば與へた、彼は昔の學友ウ

井ルヘルムと、其親戚をルードルスタットに訪ふた、此訪問こそ彼が戀の生涯に於て、最も記憶すべき一大事件であつたのである。

ルードルスタットは、青山密林の間にある處で、サーレの流れ、其の溪澗の閑靜を破つて、藍のやうなる緑の紋波を湛えて居る、その風白く氣清らかなる處、天然の妙趣を占めて、レンゲフェルトの一家は住んで居つた、而して此家の主婦レンゲフェルト女は、即ち學友ウ井ルヘルムの縁戚である、此家に二人の娘があつた、姉をカロリチと云ひ、妹をシャローツテと呼んだ、姉は已に他人に嫁し、妹なるシャローツテは未だ未通の處女であつた、芳紀正に二十を超へたること僅に一歳、笑ふが如き春は方に酣であるが、天は此佳人を山谷の間に遅棲せしめて、其の福音を將來に待つものゝ如くであつた。

彼等姉妹は幼くして父を失ひ、爾來その慈母の懷に依りて人と爲つたのである、而してシャローツテが十五歳の時、彼女の母はウワイマルの宮中に仕公すべき將來の準備として、彼女を瑞西に遣つた、夫れより三年の星霜は梭の様に

飛んで、彼女が十八歳の時、彼等姉妹はマンハイムなるウナルツチゲン女の家を訪ふ、茲に始めてシルレルを見た、是れ實にシルレルとシャローツテとが初めての會見であつたのである、當時シャローツテは方に處女の盛春に達し、その窈窕たる麗姿は、此白面詩人を引着するに充分であつたのである、その涼しき眼は無心の中に笑ふが如く、その楚々たる風姿は、歩々蓮をなすに似て居つた、そして彼女が品性の眞摯多情なる、能く同情を投じて、他と共に苦樂を分たうとした、實に彼女は宛然たる理想の貴女であつたのである、されど當時彼女は一の病を有して居つた、彼女は之より以前开が満心の愛情を献じたる半身を奪はれたのである、彼女が戀人は身を軍籍に置いたものであつたが故に、その職分を盡す爲めに遠く遙かなる地平線下に隠れ行いた、彼女の母はその戀を非とし、戀人は亦遙かなる異郷に去つた、此に於て彼女も亦一の失戀者であつたのである、然も此寂寞たるの時に於て、詩人の失戀者は同じく失戀者の貴女を訪ふた、彼のルードルスタットにシャローツテを訪ふた時、佳人一宵

の夢は、鳩鴿の花瓣を携へて來つたか何うであつたか、开は知らんが、されど運命の女神は、彼等を此靜かなる閑地に相會せしめて、その將來の記録に向つて竊かに微笑を呈して居つたのである。

時は十一月の末であつた、日は既に落ちて暮煙方に村舎を罩めた時に、馬上に見たる二人の旅客があつて、寂寞たるルードルスタットの路を越えて、行手を急ぎ來りつゝあつた、秋は已に老いて晚鴉徒に啼く處、馬蹄踏み行くの道は碻確たる溪道であつたのである、此二騎は行きくゞて、漸くレンゲフェルトの門に近づくや、一騎は諸譚を以て貴女を驚かさうとし、面上深く外套を被つて居つた、されど貴女は、直に其の從兄なることを認めたのである、けれども他の一騎は風采堂々、白面にして頬瘦せ、鞍に依て稍々躊躇する様子であつた、貴女は又此人を知らなつたのである、さるに何ぞ圖らん、此旅客とは今より三年前マンハイムに於て會見し、且つその時より尊敬の意を表したる、詩人シルレルその人であらうとは、ウヰルヘルムの彼が名を紹介するに及んで、貴女等

は丁寧に彼を迎へたのである。

此會見の一夜は十年の如く、彼等は彼等を紹介し、彼等を彼等に親近せしめたのである、二人の青年と二人の貴女、共に相對して懃懃を通ずる時、此若き四個の心臓の鼓動は、正に此四個の顔を醉はしめたのである、シルレルとシヤールロッテとは一見殆んど相棄つる能はざるものゝやうになつた、彼が彼女と相語るの時、情線は眼より眼に通じ、心より心に入つた、嗚呼、此名譽ある詩人と、清楚なる佳人と、その不言不語の情を投じ合へるの時、その瞬間に於ける彼等が胸裏や如何であつたらう乎、ルードルスタットは、此日正に彼等が運命を結びつけたのである。

彼は此忘るべからざる戀人の面影を心に疊みて、ウワイマルに歸つた、ルードルスタットの貴女は、又その日より彼の姿を幻に見るに至つた、此後冬に至つて彼は又た此地に來つて、遂に戀人と懇談するの機なくして空しく去つたが、更に來夏を以て彼女を見舞ふべく約束した、そしてその間、兩者が間に於ける

戀は彌々募り、愛の手紙は矢の如く彼等の間に飛んだ、而も此文通こそ、彼等を結べる一種の結納であつたのである。

戀の成功 シルレルの結婚

是よりしてシルレルのシャロットテを愛するの度も、シャロットテのシルレルを慕ふ度も、愈々熱心に成つて來た、此時に於ける彼等が愛は、恰も火爐の中に投ぜられたる金屬の如く、實にその極度に達したのである、シャロットテは其の心の秘密を姉に告げて、シルレルの到底彼女の胸より離す可からざることを語つた、シルレルはその生涯の幸福を賦與する人である」と、彼等は茲に至つて割符のやうなものになつたのである、居常沈着であつたシルレルも、シャロットテの前には又一個の無邪氣なる小兒であつた、此時ルイトルスタットの山村は、面白い懺悔を傳へた、彼女の思ひに昏るゝ處へ、シルレルは私に其の下に往いた、并は彼等が秘密と秘密を交換し、心と心とを抱擁しやう

としたのであつた、其の懐かしき愛人が不意の訪問に依て、山村の寂寞を破つた時に、彼女が歓迎は一方で無かつたのである、此に於て彼女は遂に心の秘密を戀人の前へ懺悔した、彼れが妻とならうとする望を懺悔した、而して彼と同棲する日の近き未來に於てあらんことを請ふた、於此乎、シルレルは其の久しく渴望して居つた戀を得た、愛を全ふした、彼は四度とも其の戀に失敗した、彼は名譽ある天をば得たが、未だ戀愛の地をば得なかつたのであつた、然るに今や彼はその理想の戀人を、淑女シャロットテに於て得た、嗚呼、情天の斯の佳人を山村に遅棲せしめたのは、四度彼が戀を弄んだのも偶然に非ざるを知ることが出来る、戀の天地は全く彼等兩人の有とはなつた、シルレルは熱き接吻と、高き心臓の鼓動を聞かた後、ルイトルスタットを去つたが、歡然としてシャロットテの下へ書を送つた、而して契約以後の天地の如何に愉快であつて、幸福であるものであらうかといふことを述べた、而も此戀の成功は全くシルレルの思想を一變したのである。

「我が周囲の光景は、如何に變遷したるよ、我生涯の一步を轉ずる度毎に、御身が美しくしき姿は我が眼の前にある、御身の愛は太陽の光の如く、華麗なる物象の、天然の表面を裝飾したやうに、我が上に宿るのである、我身は廣き天然に逍遙して、其散策から歸つて來れば、我が寂寞なる書齋は、我が散策した天然のやうに、華麗にして永久なる一個の影像を與へる、御身が記憶は我を萬有に導き、萬有は我を我に歸へし、又御身を想起せしめる、予は未だ曾て我精神の基礎を得たる今日の如く、我が狂熱に乗じて、大膽自由なる思想の上の旅行を爲たことはない、一個の家、此一個の家は、已に予をして其の漂泊の生涯中に没せしめることはないであらうし、予は今何處にか、予自身を見出すべきかを知る、御身の中に。(全上)

斯くて彼は遂に戀人の腕を擁すべき日を迎へた、レンゲフェルト女は、その娘を彼に與ふべく許した、此に於てか兩人が戀の約束は公然の承認となつた、公然の秘密とはなつた、互に腕を擁し、草を布き、竊かに明眉の山水に對して、

未來の家庭を理想せる彼等は、明かにその戀を承認せられたのである。

一千七百九十年二月二十日、此日は如何に幸福にして、彼等に向つて楽しき日であつたらうか、旭の光は常の如く東天を染め、日は例に依て清く耀いて居つたが、彼等が嬉は常の如くてなかつた、久しく愛情の花束を交換したる二人は、此日を以て實に花嫁花郎として一堂に立つた、而して此結婚の式は最と莊重に擧げられた、斯くて彼は遂に一躰となつた、シルレル時に年三十有一歳、シヤローツテは芳紀方に二十四歳であつた、而も此兩人が婚姻は、如何に好く配合し、如何に好く調和したと思ふか、彼等は日月の如く相照應したのである、シルレルはシヤローツテに於て、優和なる感情を得、シヤローツテはシルレルに依て高尚なる理想を得た、是より吾人は元より大なるシルレルを認め、シヤローツテは其の清潔なる令夫人たると共に、又彼れが思想の聖母であつたのである。

家庭のシルレル 八年目にて親子の會見

斯くの如く彼は其の戀人と結婚することを得た、而して彼は今その家庭の幸福を全ふした、然も婚後に於ける彼等は如何に樂しかりけん、數月の後彼はその手紙に左の如く記した。

「愛する妻の我が側に居れば、吾人の生涯は完く別のやうである………
 ……世界は再び詩的の形式を取つて、予が周圍に美裝し、昔日の感情は又再び我胸中に覺醒しつゝあるやうに思ひ得られる………運命は我からその困難てふことを征服した、予に萬事を將來に囑望する………予は青年時代の再び歸り來つたやうに感じ、予が内部の詩的生活は、予に其の青年時代を恢復すべきを信ぜしめる」と。(全七)

一千七百九十二年六月、彼は其の妻と共にドレスデンに行き、歸途彼の母と妹とを見た、彼等は互に相見なかつたこと、茲に八年の永き間であつた、彼等は

互に濃情を交換した、而して此行はシルレルをして、懷舊の情に轉た堪へざらしめたのである、彼は後ハイルブロンに行き、その白髮の老父と相抱ける時は、その情懷如何であつたらうか、彼れが郷を出てしより爾來に永き星霜は、その郷里に幾多の變遷と悲劇とを残したが、而も彼の一家は皆無事であつたのである、父は老ひたりと雖も、猶ほ名譽ある子の歸省を歓迎するに堪え、母は弱しと雖も、又その祝盃を擧ぐるに堪えたのである、家族は共に一堂に相會し、霸然として昔を語つた、彼は思に轉々幾多の變遷を追想して、感極まつたのであつたらう。

彼は年と共に父とはなつた、久しく渴望して居つた家庭の福音は、愛兒の誕生に依りて更に幸福とはなつた、彼は其の兒をカールと名づけた、然も此愛兒が教育の爲には、大詩人も亦一個の祿姆の如くであつた、而して靜かに眠むる嬰兒の頬に接吻せるが如きの時に於ては、彼は其の世界に於ける大詩人たるを忘れたるやうであつたのである。

一千八百二年、彼は奥國の帝王より貴族の號を賜はつた。

シルレルの終焉

樂しき年は何時しか過ぎて、一千八百五年とはなつた、彼の健康は幾回かの兆候の後、最も烈しく肺患を打たれ、彼は遂に恢復すべからざるものとなつた、四月二十八日には最終の襲撃は來つた、降りて五月六日、彼れは愈々衰弱した、而して彼の神経は絶へず痙攣し、彼は嚙語を發するに至つた、越えて九日に至るや、天はその最後の訣別を承認した、翌日の午後四時、彼はナブサ(Naphtal)と叫んだが、其の最終の音は唇中に没して聞えなかつた、彼は已に語ることに能はないのを知り、何事が書かうとしたが、唯だ僅に三字より書く能はずして筆を放した、彼の妻は其の傍らに跪いて何事か聞かんとしたのに、彼は其の手を執て堅く握り締めた、嗚呼此瞬間こそ、彼等夫婦が永き別れてあつたのである、シルレルは遂に逝いた、訃音は忽ちウワイマルの全市に傳へられ、幾多の

知己朋友は其の早世を惜んだ、彼は悲涙に昏る、妻子をば後に残したのである、五月十一日彼が葬儀は夜に行はれた、其の夜は密雲天を蔽ふて暗く、雨は將に來らうとして、悲鳥切りと啼いた、而して棺の地床に下されんとするや、天は此不朽の偉魂を迎ふるもの、如く、密雲俄に晴れて、冷かなる月の光りは、靜かに棺を照し、既にして埋葬を終るや、天は又此大才を悲しむもの、如く、月色忽ち洗んで凄風俄に起り、悄悄として送葬の一行を送つた、斯くて詩人の肉は一塊の土に歸し、その偉魂は永く地下に眠つた。(詩人シルレル参照)

吁、彼は實に三十八年の短き生涯を以て、而も能く獨逸一代の文權を握れるを想ひ來つたならば、吾人は方に一掬哀惜の涙に、その偉才を賞せざるを得ないものである。

英國文豪

戀のデヨンソン

不徳の十八世紀

現時に於ける英國文學の隆盛は、實にその源を十八世紀に出たのである。故に今日の英國文學を知らんと欲したならば、宜しく當時の文學界を知らねばならぬ。而も之を知らんと欲したなれば、先づ十八世紀英國文界の巨人たる「ドクトル、デヨンソン」其の人を知らねばなるまい、彼は虚偽浮華の中央に立つて、「眞」と「誠」とを以て生命とはなしたのである、カアライルの所謂「操觚者」としての英雄は、即ち彼れデヨンソンである、十八世紀に於ける英國は、蓋し彼に依て風雲を作られたるに外ならない、而して此眞誠の文豪は、抑も如何なる戀をば歴史に残した乎。

世界の治亂興亡は殆んど時を等ふする、我が元龜天正の戰國時代は、恰も英國に於てはクロムウエルの革命があつたが、星霜茲に移ると共に十八世紀の大

平なる舞臺は迎へられた、四民は安居逸樂に耽り、邯鄲一睡の夢は長閑に結ばれて、又暫くは覺むる時がなかつた、然し乍ら積水も替へざれば遂には腐敗する、時世も亦た動かされは終に壞亂するのである、五十幾年泰平に安んじ馴れたる社會は、元氣日に消磨して偷安姑息に陥るは、蓋し數の免かれざる處だ、されば十七世紀末より、十八世紀へ亘りては、紀綱紊亂し、愈々其弊風を逞ふして、世は擧げて悉く虚偽輕浮の奴隷となつた。

「不徳」は實に十八世紀に於ける表標である、十八世紀の社會に於ける總ての權勢者は、即ち斯の「不徳」の化生物であつた、後世吾人が此有様を觀て「不徳の怪物屋敷」の稱を附する、誤歟、當乎、ジョンソンが戀を語らんと欲するに先ち、乞ふ少しく其の當時の風俗に就て言はしめ給へ！。

一、當時に於ける社會の習俗

一夫一婦の説は基督教の專有持論の如く、今日に於ても唱道せらるゝにも係はず、妾を蓄ふるの弊風は、已に既に當時に於て公然行はれて居つたのである、

國王ジョージ一世が、后妃を幽閉して二美人を寵し、日夜酒池肉林の豪奢に耽り、ザヨルジ二世が常に寵姫と戯れて、國政を顧みなかつた如きは云ふも更で、所謂紳士の名ある輩は、等しく妾を蓄へぬを以て恥辱とする程であつた、加之妻妾を一堂に置くを以て尙ほ未だ満足せて、酒樓に遊びて下婢に戯れ、最も甚だしきものに至つては、之を外妾とするを以て、大に名譽とする位であつたのである、されば當時に於ける俱樂部又は酒樓にあつては、常に美人を置いて客を招くの具となし、若し美人あるに非ずんば、酒樓の門前寂として雀羅を設くるやうであつた。

二、當時に於ける世人の愛情

さればその當時に於ける世人の戀情は、如何であつた乎といふに、其の多くは淫縱不貞にして、全く道德の修養を知らず、女子は嬌態を以て男子に媚ぶるを以て天職と誤信し、男子は美人を尊敬して、其の愛を得んことを是れ力むといふが如くに至り、社會は全く「不徳」の悪魔の縱躍する處となつた、然し乍ら愛

戀は元と乾燥なる人心をして、圓滿なる交情をなさしむるものである。而して此戀愛の褻瀆せること、斯くの如く甚だしかつたが故に、社會は極めて野卑なる方面に向つて赴くは正に當然の事であつた、而も此時に於ける男女の戀情は如何であつた乎。

三、當時に於ける男子の戀情

ゾオラの「ナチ」を讀んだ人は、誰れしも區々たる一女優の爲めに、國家の伯爵大臣が、手球に取つて投げられたのを知るであらう、議會を解散する程の勇氣ある大政事家も、其美人に對する戀情のためには腸を鎔かし、渠を弄ばんと欲して却て彼女の爲めに弄ばれ、而も戀の奴隸とせられたのである。されば朝に東家の娘と契り、夕に西家の女と走りしが如きは、救擧に違なく、甚だしきは他人の妻に戯れ、又は之を脅迫して情事を強ゆるを、男子の面目として居つた、されば爲永春水が得意時代は、泰西に於ては實に此時であつたのである。

如斯社會であつた故に、當時に於ては男子は婦人を以て、自己が快樂を買ふ

べき一個の玩弄物となし、殆んど同等の資格を有する人類であるといふとは念頭に置かなかつた、例を擧げて之を言へば、或る男子が腫物を憂ふる折に、唯だその膏藥を帖らせるが爲めに、遽に婦人に向つて愛眷の情をば起して、之を使役するの權利を有するやうである、されば婦人に戀愛するは男子の自由なれど、然も處女の神聖を犯さんとするは決してその權内でない、猶有夫の婦人を姦せんとするのは最も陋劣の痴情である、されど當時の男子は、更に之を顧みずしてからに、總ての婦女は總ての男子が爲めに快樂を

最も劣等なる快樂を與ふるの義務あるもので、男子は勝手氣儘に婦人を玩弄して、其快樂を貪る處の權利があるものであると思つて居つた、故に斯かる淫靡なる時代の常として、當代に名高き美人に對しては、其美しき容貌を頌するがためには、如何にも仰山らしく、酒杯に美姬麗媛の名を記して快とせしは云ふ迄もなく、彼の「ゴールドミッス」の「サッシュユ傳」を讀んだならば、誰か此詩人「ナッシュユ」が少年の時、情婦が肌衣を灑したる酒でなければ飲まなうて、その靴

を細かに切つて揚げ物になし、舌打ちしつゝ之を喰ひたるに驚くであらう、蓋し當時の社會は如斯腐敗して居たのである、婦人の脊に三鞭酒を濺ぎ、恭しく之を捧げて、其健康を祝するなどは、又易々たるものであつた。されば上下を通じて男子終生の目的は、婦人の愛を買ふに在つて、賣女は社會の上より云ふよりも、寧ろ個人に取つて必要なるものゝ如くは是認され、公然意氣揚々、晏子の車に駕して淫市に往くを誇り、他人の面前に於て、遠慮なくも賣女との交情を披露し、その卑情を弄びたるをば、偉大なる名譽の如くに考へ、到る處丹次郎、時次郎の連中は、群を爲して賣女にうつゝをぬかさざるは稀であつた。

「兎角浮世は色と酒」といふ俚諺は、正に十八世紀に弘く通ぜし福音であつた、それ故に一度男と生れて、世に出でたからには、何卒女護の島に渡航して見たしとは、是の當時の壯年男子を支配したる戀の希望であつたのである、されば一とたび倫敦に出てし少年は、都の美人に眼迷ふて、渠等の所謂快樂を壇にする

を唯一の目的とはして居つた、而して其の父は我子に教ふるに「力めて身を美麗にせよ、某の令媛を知つて居るか、某の令嬢よりは寧ろ何々の夫人に戀着し」と、只管婦人に媚ぶるを以て心掛となさしめた、故に「婦人は總て水性のものである」とは、當時是等の男子が一般に信じたる誤見であつた、夫れであるからして、美人の前には眦を下げ、神を讚美するよりは、尙幾層倍の熱心を以て、美人に對する愛戀の爲めに浮身を糞したのである。

四、當時に於ける婦人の戀情

今日「百年の苦樂を他人に任す」を以て、婦人の身となるを憂ふる如き、可憐なる心は、十八世紀に生れし女性の思ひも窮らぬ事である、當時の婦女子は身の裝飾に一身を委ね、若し虚榮を満足するを得ば、如何なる不貞不操の汚行も尙ほ能く之を忍んで居つた、然も渠等が柔弱にして、更に加ふるに強正なる貞操を缺けるかは、賣色を喜ぶ劣醜男子を標準として、戲謔過ぎたる仇言に充分の媚を献じ、桑中の樂を貪るを以て常として居つたのである、而も渠等は好んで

猥褻なる談話を聞くを喜んで居つた、而して其の表面にあつては、極めて殊勝らしく見ゆるものも、他の裏面を認めば、更に驚くことが多かつた、ステルラはスウ井フトの感化を受けた嚴格なる婦人であつたが、曾つて同席の男子が嘔語を吐いたを聞いて、忿然として座を起ち、柳眉を逆立て叱して言ふのに「今後貴君が御出になつても御面會を謝絶ります」と頭から遣つつけたが、意外にも此婦人は、後に聞くに堪えん程の野卑なる詼諧を吐いて、列座の客シエリタンを翬縮せしめた事さへあつた、これはスウホフトの「ステルラ逸事」の中に見ゆる處であるが、共に等しきステルラにして、此様な雲泥の差ある一談を残したは頗る怪き次第であるが、全く當時に於ける婦人の眞状は、如此であつたのである、然し乍ら如何なる時代にも、倫理といふものはある、當時の女流にも亦相應なる女教はあつた、そして又當時の婦人中にも、ゴドルフ#ン夫人、若くはル#セ夫人の如く、賢明にして貞操なる「活ける女訓」もあつた、されど其の多くは戀情のために浮身を糺つし、我が貞操を翫ばるゝことを知らず、悟らずし

て、甘んじて是等男子が淫慾の犠牲となつたは、實にあはれなることである、
 チェターフ#ールド曾てアン時代の婦人を評して「社會に時めける婦人は、毎朝客を見る毎に其良人すらも驚かす程の靚装をせては、決して休まない」と言はしめた、又ヘイウッド夫人の小説「結婚せざるベットシー嬢」を讀んだならば、必ずや未婚の處女が、化粧室に於て人に接するの殺風景が、その當時に於て盛に行はれ、然も何人も更に怪まなかつたを知るであらう、今その最も甚だしきものを記せば、バルチイの「エペリナ」に於て、浴中の婦人が丸裸の盥頭の外は少しも蔽ふ處なく、靚然として男子と相見るの醜事を發見するであらう。
 吁、思ひきや春水亞流が、卑猥なる時俗に媚びやうが爲めにもしたる淫褻文學は、實に十八世紀の歐洲に於て、否その文明の上流たる英國の社界に於て、白晝而もその實現を見ようとは。

記憶せよ！十八世紀を吹暴せし風は、決して清新なる風でなかつた事を、又記憶せよ、十八世紀の社會は、白日百鬼横行して、少しも憚る處がなかつたを。

予が今茲に記さんとする英國文壇の大偉聖、眞誠詩人サミュエル、デヨンソンが戀は、方に此十八世紀に於て演ぜられたのである、さてもデヨンソンとは何人である乎、彼の戀は如何なる戀であつたらう乎、

天真のデヨンソン

一、幼時の彼と父母の戀

虎を生むものは決して猫ではない、彼の父ミカエルも、亦た浮華時代の寵兒たる、花奢風流の才人ではなかつた、其の身の丈は偉偉且つ強健で、加ふるに心も之に相伴ふて潤達剛毅であつた故に、寧ろ簡樸に陥るの傾はあつたが、決して柔弱の痕をば留めなかつた程の人物であつた、處が此硬漢は、却て不思議にも幾千の子をして、殆んど顔色なからしめた佳話を演じた、彼の父は若き時に商業實習の爲めにリークと云へる處に往て、或る商家に寄食したが、此時エリザベスといふ妙齡の婦人に思ひ初められた、彼女は是より人知れず戀の衣を

縫つたが、更に言ひ寄る機會が無かつた故に、空しく仇なる月日を戀慕の中に送つて居つた、その中ミカエルは己が郷里に歸つて了つたものであるから、彼女は遂に思に堪えかねて、直に其後をば追ひ、彼の棲めるリッチフィールド村の、向なる家に宿を求め、そして朝な夕なに戀人が慕しき聲を聞き、その麗はしき姿を垣間見るをば、せめてもの心遣りにとして居つた、然るに日増に募る彼女が戀の情炎は、束の間も此人を忘れられ、ばこそ、却つて思ふ心の彌増して、茲に包むに餘る思の數々を、水莖の跡に香はしては、幾度ともなく彼が許へ密かに送つた、けれども剛直一遍のミカエルをば、遂に動す事は出来なかつた、彼は彼女より送り來れる艶書の高く積つたけれ共、唯の一度も返事を送らなかつた、さればエリザベスは、戀人の無情を怨み、且つ啣ち、果ては終に病の床に枕に就いた、初めは唯だ、かりそめの如くに臥したのであるが、後には髪はやつれ、頬は痩せ、今は早や玉の緒の絶えなんとする計りになつた、斯くと聞るたミカエルは、直に彼女の病床を訪ふて、彼女が熱心なる愛を謝し、此上は二世

を契りて、友白髪の後迄も變らねば、一日も早く全快して、再び美しき顔を見せ給へと、心を盡して慰めたが、時は已に遅かつた。薬餌介抱の手當もその効なく、此佳人は遂に薄命にも、世に無き人の數に入つた。

この悲劇の後、彼はサラ、フォルトと結婚した。時は千七百六年六月十九日で、ミカエルは五十一歳、サラは三十八歳の嫁御寮であつた、而してサラは善良温雅であつて、能く子を鞠養するの道を知つて居た賢明なる婦人であつた。彼の父が結婚の後三年にして、母は一子を擧げた、是即ちサミュエル、デヨンソンにして、是に千七百九年九月十八日で、デヨンソンは其日直に、リッチフィールド市の聖マリーの會堂に於て洗禮を授けられた。

デヨンソンは生來庭弱にして、加ふるに不幸にも襁褓の時から遺傳の瘰癧に罹つたので、遂に其の麗しき容貌を變じた計りてなく、甚くもその視神経を損し、外見は殆んど何の變もないようであつたが、全く雙眼は明を失つたのである。されど其視力はどうやら發達して、時には人に秀でて能く事物を鑑明する

ともあつた。そしてデヨンソンが婦人の衣服裝飾を見るに、頗る敏明であつた事は、正に事實であつて、唯一遍の督見の中に、早くも髮飾から履の先迄見分けるを以て得意とする。婦人すら猶及ばなかつたといふ話である。さり乍ら斯の幼きデヨンソンが病症は、視力を損じ容貌を變ふる迄に重かつた故に、彼が母の心配は一と方でなかつたものから、その當時盛んに唱へられた迷信、即ち王者の躰に觸れる時は直に此病毒を除く事が出来る」といふに動かされ、僅かに三歳なる斯の可憐兒を懷にして倫敦に趣き、漸くにして女王アンの身邊に觸るゝ事が出来た。されば後年スレール夫人が、此時のとを彼に問ふた時、彼は「今に及んで猶ほダイヤモンドを以て飾り、黒き帽を載ける貴婦人を、靡る氣に記憶すると語られた。然し乍ら母が配慮も、女王が與へし功德も、共に何の甲斐もなく、憐むべし、彼は生れもつかぬ醜怪なる容貌とはなつて了つた。

さて此不幸なる彼は、十歳の時初めてリッチフィールドの小學校に入り、ハンターといへる教師より羅甸語をば授けられた。而して此ハンターは、頗る嚴

格なる人であつた、教師は常に小兒を叱して云ふのに、我が鞭を加へるのは御身等を禍から救はんが爲めである、されば替めて學ばさんよりは、寧ろ鞭を擧げて勉強させるに如かないと、彼れデヨンソンは、此鞭の下にあつて勉強せし一人であつた、されば、彼はその後リシヤにて、母が嚴正なる鞭の下に人となつたる靜肅の妙齡嬢を見た時に、渠は覺えず、詩聖シエクスピアが「ヘンリー六世」中の一句を叫んで言ふのに。

Rod I will honour thee for thy this duty.

(棒よ、予は汝が此職務を尊ぶ)

と、渠が總てに於ての行爲は、正に之に則つたのである、渠は夙に「A King of men」人中の王であつた、そして此時代に於て、人に負けざる魂は、彼が生涯をば作つた、加ふるに彼が非凡なる憶力は、其の師ヘクトア曾て彼に十八韻の詩を記憶せしめたに、寸時の間に悉く开を暗んじて、又一字の脱漏なく之を吟誦したものであるから、流石のヘクトアも呆然として我を折つた、彼は十五歳にし

てウオーセスタルのストアブリッチ小學に移り、餘業として群兒を教へた、然し乍ら、彼は到底錙銖の利を以て争ふことを喜ぶの人ではない、或時は父に代つて露店に書を鬻がせられ、又或時は終日之が爲めに、帽を戴かんで炎天に其の頭を晒らし、爲めに行人が指目の焼點となつた、此時に於ける彼が心中は如何であつたか、彼は窃に思ふやう、父の命に背く罪は重大ではあるけれども、而も終日路行く人にその異貌を嘲弄さるゝ身の苦をば、能く此罪を贖ふに足りるであらうと、嗚呼誰か此悲談を聞て、此可憐なる少年の爲めに、同情一掬の涙を流さざるものがあらうや、さても哀れなるは彼が異貌である。

二、少壯氣鋭の文士時代

彼は幸にも父が業の書を鬻ぐのであつた故に、彼は恰も餓狼の羊群に入つたが如く、手當り次第に書冊を擢んで涉讀した、但し素より規律のない研究ではあつたが、彼は忽ち羅甸學者となり濟ますに至つた、而して後にオックスフォードのアダムフ博士をして、一驚を喫せしめたる學殖は、蓋し此間に於て養

れたものである。されば彼は、此後ホーマー、ホーレス等を翻譯したのみでなく、早くも自ら句を聯ね、韻を探るをば樂みとして居つた。その頃作つた "The Young Author" (青年の操觚者) なる詩は、能く年少なる作者の意志と失望とを寫したるものである。而して少年氣銳の彼は、手に唾して取るべしと想像せし月桂冠は、容易に獲るを得ずして、花冠を戴かんとした功名心は、空しく昨夜の夢と化して、無邪氣なる昔をば戀ふに至らしめた。

彼は千七百二十八年十月三十一日オックスフォードの「ペンフロック」大學に入つた。時に年十有九歳、而して彼が英敏の名は斬然として高く儕輩の間に聳え、而も其學殖は恐らくは其師をも凌ぐに足る程であつた。然るに此大學時代に於ける生活は、全く彼をして意外なる結果を生ぜしめた。开は翌千七百二十九年の、大學の「ヴァケーション」(休日)に郷に歸つた時に、不斗憂鬱病の犠牲となつて、映々として樂まざるに至つた。越て千七百二十一年十二月彼の父は病で逝た。茲に於て彼は初めて責任ある人とはなつた。時に年二十を越ゆること

三歳、而も當時家運日に非に向つて進み、唯だ貧困の内に日を暮すの悲境に陥つた。されど彼は人の前に拜伏して哀みを乞ふを心に恥ぢた。彼は寧ろ一日の食を廢しても、一世を傲笑して天地宇宙の間に濶歩するをば樂しんだ。されど一錢の猶豫なき少年が、突然社會の富より棄てられては、又何をかする事が出來やう乎、實に彼は何事をば爲して世に處すべきかを知らなつたのである。然し乍ら彼が才藻は終に「パーミングハム」の一等書肆「ウォレン」の家に上賓として迎へらるゝに至つた。此時代に於て、彼は二個の紀念を歴史に残した。一はその處女作「アビシニヤ航海記」を出版せしと、一は彼が未來の妻たる「ジャニー」が最初の良人「ホルター」と交を訂せし事である。而して彼が戀は、之より盛なるに至つた。いてや之より戀に就ての彼が真相を記すであらう。

始めての戀

可憐の胸裡

「眞」と「誠」とを以て己が命となしたる彼は、元來文學者としては少しく枯淡に

過ぐるが如き嫌はあるが、然し乍ら彼は枯木寒嚴的の、生禪を以て任じたる人ではなかつた、彼は奇怪なる異貌兒となりたるにも關はらて、且乾燥なる哲理を索めた人にも似氣なく、婦人に對しては戀愛の情に富んで居つた、彼がスタ
 ヲプリツヂの學校に在つたる十有五歳の時、彼は既にオリキヤ、ロイドなる婦人に戀着して、眷繾の情をば寄せたる詩を送つたる事があつた、實に彼が始めての戀は、蓋し此時よりして萌出たのである、されど彼は何事にも慎密であつたからして、斯かる口碑の残つて居るにも係らて、婦人に關する瑕瑾の比較的になかなかつたは、全く彼が幸福である、マートル(樹木の名)の小枝を贈りし婦人に與へたる、十四行の詩は如何であるか、彼は眞に決して婦人に冷淡なるものではなかつた、否を寧ろ餘りに濃厚に過ぎて、却つて婦人を重んじたが故に、レルモンドフ又はバイロンの如く、艶名を流すに至らなかつたのである、されば彼が最も長く同住して居つたヘクトアは、堅く彼を保證して「デヨンソンの如く婦人に戀着し易きはない、されど又彼の如く謹厚慎直であつて、最も戀

慕の情の盛んなる時であつても、猶専ら心を道德に固守して油斷がなかつたは、恐らく他に其の比儔を見ない所である」と言はしめたのも亦其の故である、然し乍ら彼素と同じく一個の有情動物、豈に又其の欲する戀を思ふがまゝに遂げたかつたであつたらう、されど哀れなるかな彼が奇怪の異貌は、彼をして一層その道德心を堅固ならしめたとも、戀の果敢なきを悟らしめた。實に人生は漠々たる者で、幼稚の心に形造られし可愛らしき心と人生觀は、知識の増すと共に破壊せられるのは數の免れない處であつて、單に世想の表面のみを見て安んずる人はいざ知らず、苟も人心の内秘を精觀したならば、必ずや驚くべき幾多の、悲劇は發見せらるゝであらう、デヨンソンの如きも亦その一人である、彼は生れて數月ならざる中に、不幸にも瘰癧に罹り、次でその隻眼は明を失ふた、加ふるに彼の容貌は著しく異り變つたのである、されば長ずるに従つて彼が胸中に起りたる悲みは如何であつたらう乎、實に彼が當時を想ふたならば何人も轉た悽然たる感なき能はずであらう、然し乍ら彼は世の薄

弱なる徒輩を眞似て、漫りに辛楚を訴へるものではない、彼は外面に於ては極めて輕剽暢快の如く、嬉戲諧謔を事として居つた、されど………されど、其心中の苦悶は決して尋常で無かつたは、彼が博士アタムスに向つて「予は慘憺たる不幸の子である、予は殆んど錯迷した、人の予を以て快活とするは誤りである、他の眼に快活と見ゆるのは、決して快活ではなうて、實は大なる苦悶である」と、嗚呼、彼が當時の心はさても如何計り悲しくあつたらう乎、而して此哀れなる彼が最初の戀は成就しなかつたのである。

再 度 の 戀 さても奇縁なる！

「戀は曲者」とは誰が言ひ初めし言葉なるか、實に縁の赤繩は異なものである、此謹厚なるジョンソンをして、其の生涯に艶話を作らしめた婦人があつた、开は何人であつたか、………他なしエリザバス、ジャーニス………即ち當時のポルター夫人であつたのである。(前章参照)エリザバスはパーミングハムの呉服商

ポルターの寡婦であつて此時已に歳五十に近く、然もルーシイと名づけたる妙齡の娘をば有つて居つた婦人であつた、然るにジョンソンは少壯二十歳を超した計りの青年であつてエリザバスとは殆んど母子程の差ある年齢であつた、實に我が娘にも見合すべき年少の男子に眷戀したのも不思議の戀ではあるが、又我が母親とも見える婦人と共に手を握つたも同じく不思議な戀ではあつた、されば當時世は全く淫風の蹂躪せし時代であつた故に、後の人はまま此兩人が偶を以て財に目を瞞ましたる結婚であると誤見するものもあるが、詳しく當時の實況を探つたならば、何人もその戀の清らかであつた事を認めるとが出来るであらう、彼は全くモニーの爲めに左右せらるゝものではなかつた、开は其後彼が新らしき勝利を獲やうとして千七百三十七年の春、其の門生がアリックを伴ふて倫敦に來つた時、彼が唯一の武技として頼んで居つた文才も、あはれ十有五歳の時、

“Warr'd by another's fate, vain youth, be wise”

と歌ひしジョンソンも、遂に青息吐息、五色の息をつくグラシツ、ストーリーの饑客となつた時に於ても、富を見ること猶糞土の如くてあつたのである、況んやエリザバスが彼の下に齎らしたる亡夫ボルターの遺財は唯僅に八百磅の少額であつたのである

其の當世に於て寡婦と結婚した人は頗る多かつた、今其最も名高きもの、一二を擧げて見たならば、ジスレリーの如き、スチユアート、ミルの如き之である、而して世には寡婦或は年長の婦人と結婚するものがある時は、直に之を財婚であるかのやうに思ふけれども、ヂスレリー又はミルの兩婦人が賢良貞操であつたのを見れば、決して又財婚でなかつたのが知れるであらう、而も獨りデヨンソン夫人ヤリザバスにあつては、そもやそも、如何なる美質麗貌を有つては、斯くも硬骨なる少年詩人を迷溺……否な戀を結んだか、章を改めてその眞想を知らするであらう。

奇縁の眞相

一 戀の成就

予は今茲に彼が門下生たるガリックが言を借りてその眞想を介するであらふ、蓋し彼は最も好く彼の表裏を知り居つた人であれば、而してその言によれば、

「エリザバスは決して容貌態度の美しかつた婦人ではなかつた、よしや美しかつたにもせよ、縦令姿丰秀れた婦人であつたにもせよ、五十に垂んとする姥櫻に何の眺めのある筈があるであらう乎、又その才識の少しは見るべきものがあつたにもせよ、彼を恰も神のやうに敬ふて居つたポスウエルが更に其逸事を書き残さなかつたを見ても、其稱するに足らぬを知るであらう、況んや當時氣性勝ちたる婦人は、その情夫を役すること恰も犬の如くてあるとの好奇心より婚禮の當日凄きものに喩へられ、老新婦が痴女の態を擬

するに到つては、實に噴飯に堪えぬ次第であつた、然れどもデヨンソンは財の爲めに結婚したのでなかつたは、彼が一代の行實を以て之を證することが出来ると。

二、彼の結婚

嗚呼、不思議なものは戀である！、美人必ずしも才子の配偶でない、駿馬痴漢を乗せて走るを見て怪しむものは、未だ戀の真相を知らないもの、非言である、デヨンソンとエリザバスとの戀を疑ふものは其の輩だ、實に彼等は一種不思議なる戀の魔力に驅られて、而も二十七歳の壯齡を以て、四十八歳の老婦人エリザバスと結婚した、時は何時ぞ、千七百三十五年七月九日、場所は何所ぞ、デルヴェイに於て、あつた、而して彼が結婚後は夫婦の語らひ頗る濃かであつて、綢繆繚綿寸時も離るゝ事は出来なかつた程の交情で、實に他人をして艶羨に堪えざらしめし事が多かつた、月清らかなるの夕、白露繁きの朝、斯の新夫婦が共に手を携へて郊外、橋上に歩を運びたる時は、如何にその戀の樂しかつ

たであらうか、彼等新夫婦はリッチフィールドに近きエチアルといふ處に校舎を開ひて茲に生活の計を初めた、彼がホームの樂は此時より始まつたのである、

戀の戯曲「アイリーン」

自ら戀の何ものなるかを知り初めし彼は、千七百四十九年、其の著「アイリーン」の戯曲を世に公にした、并は彼が友のガアリツクが「ドルーリイ、レーン」座の持主であつたが故に、直に此新脚本が劇場に於て演ぜらるるの運になつた、而して「アイリーン」の戯曲は如何な趣向であつたかといふに、今その梗概を記せば實に左の如くである。

此戯曲の主人公はアイリーンといふて土耳其に囚はれとなつた可憐なる妖嬈婀娜たる艶女であつた、されば時の土耳其帝マホメット大帝はその國色を賞し頻りに戀慕の情をば仄めかし、アイリーンをして后位に備はらんこ

とを求めた、處が此時逆賊が或處に起つて帝に反旗を翻したものであるから、王師は進んで之を破り、その首領のカリイは死刑に處せられた、然るに此カリイは死に臨んでアイリーンも亦自分の黨與であると詐つたものであるから、頓て帝座を分ちて土耳其に君臨しやうとした此未來の皇后は、哀れにも無殘や斷頭臺の露とは消えて了つた、後マホメット大帝がその詐言であるといふ事を心付いた時は既に晚かつた、帝が掌中の愛嬖は端なくも一夜の中に碎けたのである。(全上)

是れ即ちその梗概である、縱令其の全部を窺はなくても略ほ大躰の趣向は推測することが出來やう、而して此戯曲は計らざりき不評判の結果を見るに至つた、ガアリック、及びバーリイ、或はブリチャード夫人、又はシバー夫人等の各名優が皆競ふて彼が此戯曲のために腕によりを掛けて大に力めたけれども、僅に九日間の興行にして止みて了つた、蓋し此曲が斯く迄に冷遇されたのは、その調の高くしてさらに俗耳俚目に入らなかつたが爲めてはなかつて、全く

その當時面白くなく所謂俗受け以下の者であつたが故であつた。

婦人に對しての彼 多情？多血？

江湖に落魄すること五十年、而して人生の半ばを蓬累の裡に暮したけれども、然も彼は常に堂々として曾て班扇の怨を歌ふ婦女子の痴態を學ばなかつた、彼は險惡なる風浪をば凌いで鱷噬の危きと戦い、終に波凌を躍越えてその鳳翼を雲間に振ふた、嗚呼此十八世紀の“The Greatest Soul”果して何人である乎、彼れデジョンソンは詩を詠じ小説を作り、脚本を著した、そして之と同時に道徳を説き、社會を論じ、改革を望んだ、然し乍ら彼は吾人が初め想像して居つたやうな柔弱なる文學者ではなかつたのである、さんば彼が世の總ての婦人に對する感情は又大に異なる處があつた、テーンの史に依れば彼が婦人に對する行爲を明かにすることが出来るであらふ、彼がリッチフ井ールド小學の「オリムピヤ」凱旋者の如く送られた時から、倫敦文學社會の都督として

翹望された時迄、彼は屢々ヘクトアの家に逗留した、その家の妹は彼が初戀を
 焔した處の婦人であつて、後ケアレヌ夫人となつたあとも懇親が頗る厚かつ
 た。

彼は又レイノールツの家を訪づれ、晩饗の卓に着いた後、爾來互に來往して居
 つた、然るに爰に又彼が心を誘つたはレイノールツが一人の妹である、然も此
 婦人は元來極めて無能庸拙の性であつて、寧ろその秀拔なる兄に對しては遙
 に羞色があつた、のみでなく曾て彼が事を「ザヨンソンノ風采の無骨なは、鍛
 治屋乎、さなくば土方人足の相で、一見してその貪乏作者であることを知る事
 が出来る」と逸言はれたことのあるにも關はらて、彼は頗る慇懃なる好意を婦
 人に盡し、最も深切なる眞情を運び、且つ自分が稟性の一部をだに仄かして其
 心を動かさうとしたことさへあつた、されば彼は多情漢か、多血兒乎、そは宜
 敷諸子が判断に委せやう。

果敢なきは戀

愛妻の逝去

鴛鴦親しく、他をして羨ましめたる彼が戀女房のエリザバスは、千七百五十二
 年三月十七日惡魔に誘はれて逝去した、何人も妻を失ふた時は復なく愁傷す
 るてあらふ、如何なる惡妻であつてもその終焉に涙を注ぐは蓋し人情の然ら
 しむる處である、況んや彼が如く天にも地にも又二人となき最愛の戀女房に
 別れたのであれば、その心中の如何に沮喪したてあらふかは、彼が數年の後、親
 友エドワーツに「御身は妻を有つて何事を發明した乎」と問はれた時に、「我は
 失はんがために有たことを悟つた」と答へたのでも知れるであらふ、嗚呼、當
 時に於ける彼が心事は憐むべきものであつた貪富それ何物と、金錢を見るこ
 と恰も瓦石の如くであつた彼も、其妻が死には又泣かざるを得なかつたので
 あつた。

デヨンソンの終焉

一、また起たず

更酣けしコベント公園をば微酔を帯びて逍遙し、板橋の霜を踏みて寂寞を破つた彼は、徐ろに

“Short O short, be then they reign,
And give us to the world again;”

と「睡魔」に與ふる小詩を吟じたが、「時」は何時しか彼が頭に霜を置くに至らしめた、彼は一度中風病に罹つてから後、ポルト、コートポルト、コートの僑居に病を養ふたが、千七百八十四年十二月の終に、又起たざるを知つて、彼は自身遺言状を認め、只何事も觀念して神に祈りつゝ最後の準備をばした、待醫ハッター博士は如何にかして此稀世の文豪を一日なりと永く世に在らしめやうと種々に力を盡したが、天壽既に盡きたのか、最早施すべき術もなく、彼は次第に衰弱した、彼は

死ぬる間際までも「一日の壽を長うしたならば、一日の讀書をして知識を廣めることが出来やうに、未だ多くの典籍を涉獵し盡さないで眠る事の口惜しさよ」と咳いた外は、更に何事の苦もなく、極めて和らかなる大往生をば心掛けた』

二、臨終の詠詩

或日プロウクレンスビー博士の來り訪づれた時、彼は口の内に於てシエクスピアが句を微吟して、

“Canst thou not minister to a mind deceased;
Thuck from the memory a rooted sorrow;
Raze out the written troubles of the brain;
And with some sweet oblivious antedote,
Cleanse the stuff'd doson of that perilous stuff,
Which weighs upon the heart!”

と、博士直にその句を繼して

“———— therein the patient, Must minister to himself.”

と歌つたれば、デヨンスンは莞爾として我が心を得たといふて喜んだ、彼が恬淡なる胸襟は死に臨んでも亦更に亂れなかつたのである。

病は日に重くなつた、十二月十三日の午後、彼はモリス嬢が訪問を見て、微笑していふに

“God bless you, my dear!”

と、嗚呼、是れ十八世紀のハアキユールス(大文豪)が最後の一言であつた、彼は此日の午後七時を以て遂に溘然として永き眠に就いた、時に年七十有六歳、越えて二十日、盛なる式を以て、彼はウエストミンスターの教堂にこそは葬むられた。

Johnson is dead! Let us go to the next best,—but there is nobody!”

(デヨンスンは逝いた、更に其繼續者を仰がふと思ふ、されども其人は無い!)とは、是れ此文豪が死しての後、世に反響した處の叫音であつた。

碑は詩聖シエクスピアの傍にある、その面には

SAMUEL JOHNSON, LL. D.

Obiit xiii die decembris

Anna domini

MDCCLXXXIV

Atatis suar LXXV.

と、これは此大文豪が偉絶なる學徳を後世に傳へんが爲めに刻まれてある。貢氏デヨンスン参照。

嗚呼、千古の大詩人デヨンスンが軀骸は空しく茲に消えて、青苔一片の土と化しつれども、彼が英國文壇に放ちたる不朽の偉名は、とこしなへに輝いて滅することなく、ウエストミンスター寺院の碑に彫まれて、後世涙あるの人をして

深くも曩の日に於ける此大詩人が面影をば忍ばしむるであらふ。
 風靜かに眠れる樹梢を掃ふて、孤燈影暗きの下、讀んで詩人デヨンソンが戀の
 歴史を顧みれば、人生五十年の短き命は、實に盧生が一睡の夢の如けんのみで
 ある、噫、!!

英國詩人

戀のシエレー

その美貌

戀の媒介

奏西の文士中、その美貌家として幾多の人々に最も親しく記憶せらるゝ詩人
 は、蓋しシエレーに及ぶものはなからう、バイロンと共に併ひ稱されて文壇美
 貌家の雙絶と押されて居るのは、實にシエレーである、彼のシルレルも随分清
 秀なる容貌であつて、一時は美しくしき魔力を供へて居つた、ロバート、バインズ
 も却々美貌家で、その肖像畫は久しく彫刻家の好模型のやうに仰がれて居つ
 たが、然しシエレーの容貌の如何にも理想的詩人のやうに出來て居つたのに
 比べて見れば、遙に落ちる、テニソン、ロンクフェローもその少年時代にあつ
 ては、之も亦一と方ならぬ美貌を以て持て嘶やされた、けれども之も同じく及
 ばない、その他英國出の何れの文士や、詩人を擧げて比べて見ても、その美貌

の點から云へばシユレーを以て第一とする、パイロンは彼に劣らぬ美男子であつたが、跛であつた、而してその外何れもの詩人は、青年の折は美貌家であつても、一家を爲すと同時に早くも世に忘れられて、啻にその著書の稱せらるゝ他には、美貌に就て何の程も残らない、然るにシユレーなんぞに至つては、その名の唱へらるゝ處には、必ず又その美貌をば語り傳へられるのである、而してシユレーは絶えず常に小女のやうな風貌を供へて居つた、實にその躰軀が至つて華奢な生れつきで、加ふるに何時も才子多病てう常則にもれんで、四時不建康であつたせいでもあうが、それに少兒の時から彼の容貌には殊に嬌然たる魔力をば持つて居つた、彼が鳶色の瞳は清く澄んで、恰も蜜を漉えた泉井のやうであつた、誰もその光には陥り易いやうに見えた、その朱唇には何時も樂しげなる微笑を浮べて居り、彼に一度接するものは、何れもその美に親しんだ、身の丈は高かく細りて然も張肩で、四肢五躰には常に鮮かなる血潮が調和よく循行して、活々として若く輝いて居つた、それに面ざしは丁度卵に似て

之に眼鼻を穿つたやうに美しくかつた、額は高く、鼻は高く、ふさ／＼して濃かつた鳶色の髪は、自然に得も言はれぬ美しい波を浮べてその頬を傳ひ、又後頸をば蔽ふて居つた、その顔色は妙齡の少女のやうに飽く迄白く、艶かて、全く一見衆に秀で、居つたのである、斯くの如く美てう點に於て何不足なき彼が容貌こそ、後にハリエツト、クロフと互に相思ひ慕はれて、遂に浮名を流すの媒介とはなつたので實にクロフ嬢をして恍然その美貌に迷はしめたるものである。』

その多感 不幸の基

彼れは頗る多感な人であつた、彼の容貌は常に感情の發動如何によつて一定して居らなんだ、居常は實に誠慎に落付いて見ゆるけれども、何か一朝外物の刺激に逢ふと、その喜ばしい時は非常に輝いて活々として見え、若し悲しい感情の激した時は、全く今迄の心に一大變化を來して、頗る沈痛なる相貌とはな

るのである、然し乍ら如何に嬉ぶ時も、如何に又悲しむ時も、幾度となく其顔色こそ變れ、彼が天資の容貌は、依然として威高く、且つその清らかなる美嬌は決して清ゆるべうも、變るべうもあらなんだ、そして又彼は特殊なる音聲をば有して居つた、その聲といふたならば力の這入つた音聲ではなかつたが、言はゞ音樂的とても言はうか、實に明析で最も愛すべき如くであつた。斯くの如くなる少年は、概して凡ての點に於て、又凡ての方面に於て、最も不幸なる薄命の悲運の神の冷かなる手に於て、支配されるものである、彼の如き又その一人であつたのである、彼がその性狀としては、何事に於ても最も感じ易く、且つ激し易かつたのであつた、加ふるに彼はより多く讀む事と、より多く考ふることが、人に秀でて居つた嗜好であつたのである、その上に彼が平常の考へは幼ない時からして已に子供らしからずして、毎に大人びて居つた、實に彼は何事も年齒以上の想を懷いた、然も彼は此大人びたる考に於て、多く此上もない愉快なる事をば發見して居つた、そして彼は頗る氣短で、多く

の天才に現はれて居るやうに、自慢の念、主我の念に満たされたる、所謂唯我獨尊[△]的の詩人であつた。

此れ等の外に於て彼が特殊の性行は、他の者が與へられたる普通の天才たる特殊のものとは、大に趣を異にして居つた、彼は幼少の時からして理想的生活を樂としつゝ、そうして世界の改善を爲すべく固く心に決したのであるけれども彼は遂に失敗した、否な不幸てふ天の運勢は、彼をして半途幾多の望を懷きつゝ、空しく無き人の數に入らしめたのである、彼は單に自身の性行の理想と一致しなかつたのみではなく、此の種の天才に取つては世界改善てふ事業の餘りに大き過ぎたのである、それかあらぬか、スペチャ灣上この奇才を伊水の中に溺らして、長くその末路の哀れを忍ばしむるに至つたるこそ、悲しくも亦歎はしき次第である。

彼の性行

一、祖先と少時

學者醉ひ、讀書社會醉ひ、天下眼中一丁字あるものを、蕩然として酔はしめたるシエレーは、一千七百九十三年八月四日を以て英國スーセック州に生れた、然も斯の奇才の詩人を出したるセレー家は、その富と、その高貴とに於て、他の滔々者流とは出を異にして居つた。その祖先は西班牙アーマタ大敗の折を以て没せるエドワード、シエレーありて、世上の尊敬を博したと傳へられた。彼は幼にして文學を好み、古譚を愛し、且つ自然の美を愛して薄霧峯を捲くの夕、冷風梢を拂の晨又は星光耿々たるの下、獨り逍遙として清美の争ふ處、多思多感の小兒が、山紫水明の裡に恍然として自然の美の愛の懷に至りたる、之れ後來文壇に屹立して、其名聲を博したる因である。彼は六歳の時端嚴狹識なるエドワード牧師に教へられ、十歳にして始めて小學校に入つた、彼は幼時最も特意として、愉快として居つたのは、實に化學的試験であつた、彼は時々電氣の試験などをしてその兄弟を豪い目に遭はせたこともあつた、その外燃質の液躰などを燃やして小さき妖怪の眞似をなし、或は惡魔の形をなしてその朋

輩を驚かすなど、それはく悪戯ものであつた、それに幼時より又頗る滑稽もので、道化茶番の花俳優として、毎時も一家を笑を以て賑かしめたものは又實に彼であつた。

二、自尊時代

彼は著るしい早熟の少年であつて、幼時より已にく壓制を嫌ふた、彼は未だ乳臭い身を以て其姉妹を養育して居つた女教師の壓制に對して、反謀を企てたともあつた、そして彼のイートン校に送られた時の如きは、僅に十二才の少童であつて、他の同輩に比すれば未だほんのお坊ちやんであつたが、然も多少は自分の門地と、家柄とに就て高慢の念を萌した爲めであつたらうが、要するに彼が先天的に、壓制の舉動を嫌ふ心から、新なる學校生活の何人も免かれ能はぬ、上級者の爲めに學僕同様の、取扱をせらるゝことに對しては一切御免を被むつて、如何に嚴命さるゝとも頑として應じなかつた、之が爲めに頗る上級の觀心を害ふて寄宿生活には多少の困難は嘗めたが、彼は何如に非難され

又如何に貶責せられ、罵詈噓嚇せられたが、然し何人も彼の意志を枉げて服従せしむることが出来なかつた、之が爲めに愈々彼はその自尊を昂進せしめたが、蓋し之彼に世界の改善てふ大決心を起さしめたる大元動力であつたに外ならないのである。

壯時の激情

一、小年化學者

彼は拾七歳の時、オックスフォードの大學に入つた、然もその時代に於ける彼が感情といふたならば、唯だ熱心と嗜好の現はれて、化學にのみ志して居つた、そして其様といふたら殆ど小年化學者とも言ふべき見得で、何人も亦彼が詩人とならうとは心附かなんだ、加ふるにその居間の亂雜であつたのには皆々一驚を喫した、當時彼が同窓の友は、彼が寄宿舎の居間の有様を記して左のやうに言ふた、

「彼が部屋の内には書籍、紙、試験器械等と一所に長靴、短靴、ピストル、衣服、シヤツ、土器、ガラス瓶、繪具、箱、包などの種々なる品々が、机上、床上の差別なく、座敷満面、そこらじうに散らばつて居つた、その有様といふたら丁度少年氣鋭の化學者先生が、造化の奇妙なる神秘をば分析でもしやうとして、先づその手始めに、原始混沌の形を再現せんとして勉めて居るかのやうであつた、殊にそのテーブル掛けの絨氈には色々の汚點が出来、その上處々に大きな焼けちぎれた穴なんそがあいて居つて、それはく眼も當てられぬ亂雜であつた、さるに此の室の主人はと、その顔を見れば、驚くばかりの美少年であつた、

と之即ち友の語る處であつたのである。

二、ポケット中の固バン

彼はそのかはり一度勉強し始めるときには、全く規則だつて三度の食事も喰なかつた、其代り彼は兩方のポケットへは毎時もく溢るゝ許りに固バンを

押込んで居つて、若し腹が飢つて来ると、その勉強のひまを見ては、何時でも處嫌はずに之を噛ぢつて居るのである、或時朋友と共にロンドンの町中を散歩して居つた時に、彼は何思ひけん、遽だしくパン屋へ駆け込んだ、之を見た友輩はどうするであらうと思つて居ると、彼はやがていとも大いなるパンの塊を買つて来て。道々それを引裂いては友人に馳走するのが例のやうであつた、然も彼れの一行はオックス、フナールトの大學生だ、その中で若し此馳走を辭退して喰ふのを嫌がるものでもあると、彼は忽ちそれをとがめて「何故に親友が與へたパンを好まないか」と怪訝んだ、そして自分は他には構はず、朋友の忠告するも、又それを冷笑するのも、一場の戯れ談と聞流して、途々二斤、または三斤程の堅パンを噛りく喰つて了ふてあつた。

如斯く一風變つた人物ではあつたが、又彼のやうなる倦怠の情を出さずに、孜孜として讀書に勵んだものも亦稀であつた、されば或朋友は彼が一日讀書をした後ちに、彼に向ふて斯ふ物語つた、

若し僕が君のやうに熱心に讀書することが出来たならば、僕の髪の毛、僕の齒は床の廻りに抜け落ち、而して僕の目玉は胴着のポケットの中へ逃げ潜んで了ふであらう

實に、彼が様子、と奇行は如斯であつた。』

無神論者

一、英國の兆民居士

彼はその奇行の點からも、又その思想の點から見ても、我が明治の一奇人として世に知られたる中江兆民に能く似て居つた處が多かつた、加ふるにその無神論を執て固く信じ、且つ告白した如きに至つては實に同一轍に出たのである、彼がオックス、フオールド大學に居るや、常に宗教上の問題に對して、何卒定まつた意見を持つべく勉めた、而してその心に信じた處は「無神論」であつた、彼は故に好んでヒュームの愛讀者であつた、されば彼は「無神論の必要」を

う著を出して世に公にした、それは正に中江兆民が續一年有半のやうな性質のものであつたのである。』

二、放校と勸當

彼が著書「無神論の必要」の一度世に知らるゝや、峻酷なる校長は自由思想を惡み、彼が十七才の時、大學は遂に放逐の嚴命を彼に下した、その時教師は誰一人として彼に對して一言の訓戒的言葉を與へず、又一言の誤見を訂さんともせず、全然教ゆべからざるものゝやうに扱つた、嗚呼ヒューム愛讀者たる彼、無神論を嬉ぶ彼、年少氣鋭なる彼がその所論が或は激甚に失したるものでありとするも、何そ必ずしも恕すべき所がないとせやうや、然るに何そ圖らん、事一度茲に到り、學者は彼を呼ぶに「惡魔」の稱を以てし、「不道德」の名を以てした、加ふるに彼が朋友中の或る者は又彼を嘲罵するの境に陥つた、その憐なることゝいふたならば、丁度革命的詩人が新紙攻撃、虚説傳播の犠牲となりたるのと殆んど同一であつた。

當時彼を愛して居つた慈母は、學校の酷待に對して實に左の如く言ふた、

「十七歳の時、道德上の清き習慣、献身的慈善の心、一視同仁の情に充たされるの違もなく、何人にも正義の爲めには犠牲とならんと覺悟し、同情の涙、愛憐の情に燃やされて居つた兒は、全然惡徒の如くに取扱はれ、犯罪者の如くに放逐された」

と、されど又彼が父は全然その母とは意見を異にして居つた、父は學校の所分が正當であるとなしたるのみでなく、自分も亦彼が無神論者であるのを喜ばなかつた、それ故に父は遂に彼をば一家より放逐した、その様は殆んど、ミラポールの父が、強制的に禁固令を執行した如き處置に出たので、彼は已での事に、宗教上の裁判所にも送られやうとした所であつた、此等の事情からして、今迄相親しかつた彼の朋友は、彼を見捨て了つて又相手とせず、彼は此に於て覺束なくもロンドンに漂泊寄寓して、暫くは不規則なる窮迫の日を送らねば

ならぬ身とは相なつた、思へば彼血氣の銳想到に猛進して、將に茲界に爲す處大にあらんとした、一切那、無慈悲なる鉄槌は遠慮なく下つて彼が思想を挫いたのであつた。』

彼の失戀

其の基は戀人が他人と結婚

彼は従妹のハリエット、グロブとは幼ない時分からして、筒井筒の振分け髪の折からして、互に戀ひ、慕ふたる仲であつたのである、處が彼は壯盛なる銳氣に驅られて、一度「無神論の必要」てう書を著したものであるから、世間では彼を何れも相手にせず、此戀人迄が同じく彼を對手にしないやうに相成つた、そして間もなく戀人のハリエットは縁を求めて他に嫁した、嗚呼、儘ならぬは浮世の戀の常則であるものか、そも又情天の忘るゝ所となりたるのであつたか、彼は此事を耳にし、且つそを實際に見るに及んで、如何許り泣き悲み、戀てうもの、果敢なきこと、蘆生が一睡の夢にだも如かないものと、感じたてあつたら

ふ！

蓋し世に生を享くる、生きとし活けるもの、孰れか情なからうや、春水波平かにして鴛鴦相伴ひ、秋山葉落ちて麋鹿相呼ぶは即ち情天の然らしむる所である、さる中に賢を賢として色に代ふるものは、之れ情の冷かなるものではなくつて、全く人生の務めを解して大に爲す處あらんとするの情が熾であるが故のみである、されど一度迷夢ふたならば愛戀の外、天地人生あるかをも忘るゝに至るが、多くの皆變らざる處で、もとこれ青春の迷夢である、故にいかでか覺めずに居やうや、天女と思ふて居つた愛の戀人も、悟りて見れば共に等しく臭骸である、否な或る魔力ある外膚を被れる骸骨である、桃を分ちし深き情と喜んで居つたも愚や、寢息臭さき彼の口の喰ひあましかと思へば、何ぞ迷へるの甚だしきや、嗚呼過てり、迷つたり、今は是にして、昨の非なるを知ると、思ひ直したるは束の間であつて、その失戀の反動に伴ふ戀の炎は、層一層熾なるに至つた、今迄は弱り切つて居つた彼も、生涯第一の痴劇を演じたのである。』

義 俠 の 戀

一、一擲同情の愛

その始め、彼は逐客となつてロンドンに彷徨ふ身とはなつた、然も此時に於ける彼が困乏や非常なるものであつた彼は今や其ハンを求むるにすら窮する程であつた、それを聞いた彼が姉妹は彼が爲めに學費を送るべく親切を盡した、そして姉妹等はその同窓の友なるハリエツト、ウエストブルツクといへる嬢に托して幾干の金を送り來した、彼は此の有難き賜を得て大に喜んだのである、加るに彼女が快活な、愉快な、而して質朴の傳言は如何許り彼の心を慰さめたであつたであらうか、困乏の極に達したる彼が面前に現はれたハリエツト嬢の姿は、眞に天降つたる天女か、菩薩の如くに見へたであらふ。

彼女はマウント街の珈琲店の主人「猶太人」と綽名せらるゝものゝ娘であつて、芳紀正に十六、花の顔、月の眉、色は高嶺の雪を欺かん許りに白く、二八の春は

將に笑はんとするの乙女であつた、加ふるにその髪の美しきと、その聲の愛らしきとは、その清らかなる眼と相和し、艶麗快然として多血の男子を腦すべく充分であつた、然も彼女は當時哀れなる境遇であつたのである、彼女にはエリザと呼ぶ姉があつたが、年令丁度倍程も上であつた故に、彼女は姉に對して宛も母の如くであつた、此姉妹はシエレーの窮乏を見て、此不幸なる貴族の嫡子が落魄に向つて同情の涙を注いだ、此後シエレーは屢々ハリエツトを訪ひ、兩人が間は繁く信書が往來されて、彼等の心を交へしめた、此時彼のハリエツトを愛するの情は未だ全く盛に至らなかつたが、彼女がその學校に於ける苦痛と、家庭に於ける悲境を聞くに及んで、同病相憐むの情に驅られざる能はなんだ、彼女が告げし處によれば、彼女は懊惱の極自殺しやうとする迄に思ひ詰めたことがあつたと言ふた、而して彼女は彼に救を求めたのである。

されど彼は當時先の戀人ハリエツト、クロブを慕ふた餘情未だ冷めなんだ、處であつたが、彼女が頻りに書を寄せて己が薄命を啣ち、助けを彼に求めること

が急であつた故に、彼はそれを慰め、且須からく耐忍して、困苦に打勝つべきを以てした、されど彼女は如何にしても耐忍し難きを述べて、一身の運命を彼に托した。

君ならて誰にか見せん梅の花

色をも香をも知る人ぞ知る

で、ハリエットは具に己が悲況を訴へ、「涙を以てシエレーの足下に伏し、彼が救を乞ふた、濃艶臨むときは心なき水も波色を變へ、輕漾激するときは無情の花も唇を動かす、ましてや、多情多血のシエレーに於てをや、壓制を見ること怡も蛇蝎の如くなりし彼は、今や鳩の如く順和なる佳人が壓制束縛の犠牲たらんとするを見るに忍びずして、薄命の佳人が生涯を一切彼に委ねやうとするを見て、何ぞ彼は袖手傍觀が出来やうか、彼は今迄は非結婚論者であつたが彼女を壓制の下より救ひ出さんが爲めに、熱心なる結婚論者とはなつた、己は貴族の嫡子、彼女は一珈琲店の娘である、然るに多感なる彼は、ハリエットを

救はんが爲めにその懸隔あることをも忘れたのである。』

二、愛を以て生活せん

此時に於ける彼は一年の収入僅に二百磅のみであつた、嗚呼、此二百磅の少額……いかてか二人の生活を支ふることが出来やうか、然も哀れなるハリエットを救はうが爲には

「一年二百磅の金、若し盡きた時には、我思ふには我等は愛を以て生活しやうと考へる、」

とまでに彼は覺悟したのである、そして此時兩人が間に於ける情愛は全く清らかなるものであつた、彼は一意義の爲めに彼女に同情を寄せたのである、

「ハリエット、ウエストブルックに關する大兄の戲弄には覺えず腹をば抱へた、兎角己が心を以て他人の思を付度することは、これ一般の誤謬、かと思はれる、若し小生にして多少戀愛の何たるを解するものとせば、小生のは戀愛に非ざるものである。」

とは彼が語つたる處であつた、實に彼は未だ彼女を戀ひ慕ふたものではなかつた、それに誰だ彼女を壓制の軛より救はうが爲めには「感謝の念と嘆美の情とは、悉く我れに彼れを永久愛すべしと命じた」とまで叫ぶに至らせたのである。』

出奔と結婚

戀人と手を取り交す異郷の空

何人か墻を越えて走ることの不徳で而して不義なることを知らなからうや、されど彼はハリエットの薄命を救はんが爲には、社會の毀譽も、朋友の嘲笑も、身分の懸隔も、父の怒も、我が身の災厄も、擧げて皆顧る處がなかつたのである、彼は嬢の爲めに其父に向つて子女取扱の無法を諫め、且つ長篇の論文を草して、數回嬢の父に迄送つたが、それは悉く徒勞に屬して了つたのみならず彼が親切なる結果は、計らず嬢の爲には仇となりハリエットも亦父の家を逐れ彼が

下に慰籍せらるべき不仕合とはなつた、彼女が一身は此に於てかシエレーの處置如何に寄るのみとはなつた。

事情は愈々悪しくなつた、彼は彼女の請を容れ、今は廣きロンドンにも居たまらなくなつたので、前後の分別さへもなく、互に手に手をとりが啼く、花の都を後にして、出奔すべく決心した、而して此年九月の頃彼は馬車を驅つてヨークに到り、馳せてエチンバラに赴いた、勿論行先に何の目的があつたてもなく、少し許りの路銀はあつたが、それさへも束の間に使ひ盡し、今は二人とも熱心なる愛の外、又一物の財さへもなくなつた、此に於てか彼等は漸くその宿屋の主人に泣き付いて、何程かの金借り、蘇國の禮式に従つて此所にハリエット嬢と結婚の式をば擧げた。』

家庭のシエレー

一、調和と不調和

金盡くるの日には互に愛を以て生活しやうと迄決心したる若夫婦は、ジョージ街の客舎に幸福なる日月を送ることゝはなつた、されど是より先き彼等の結婚せしを聞いたシエレーの父は大に怒つて其送金をば停止した故に、彼は叔父なるビルフォールドをたよる外又如何ともせん方なかつた、且つ此無謀の舉は、ハリエツトの父迄も怒らして、僅の手當すら補助して呉れなかつたが少時にして漸く二百磅の金を給することゝなり、又その翌年にはシエレーの収入もこれに倍した故を見れば父の怒も和らいて、彼等は二人の父より二百磅づゝを給せらるゝに至つた、而して此時に於ける彼は多くは讀書に耽けたその年の九月になると友人のホッグといふが來ので、彼はそと共に倫敦に行つたが、望を得ないで再びヨークに戻つて來た、所がその留守にハリエツトの姉のエリサが來て居つた、彼はエリサの美しくしき容貌と、清き心とが婦人の模範とするに足るものであると償し、エリサを信じたことが丁度母のやうであつたされど此エリサの同居は彼に取りては迷惑の至りであつた而してそは實

に後日の悲劇の一原因となつたのである而して今迄友のホッグと親しかつた彼は、その妻とエリサとを伴ふて忽然旅に出掛けた、蓋しこれホッグがハリエツトに對して親密その度に過ぎたのを憤ふつた爲めであつたのである。彼等の一行は始めケス井ツクに到て文を愛し、次で愛蘭の首都グブリンに至り、革命的運動を爲すと共に、大に四方に檄して新教と舊教とを論明した、然も彼が立論こそ一千八百二十七年英國々會を動かして、舊教解放を决行せしむるに至つた、彼はそれより多くの地を経て再び倫敦へと歸り來つた。此後彼はロンドンの半月街を去つてビンリユーに移り、一千八百十三年六月一兒を擧げた、彼は愛兒の名をアイアンセー、エリザと命じた、そを彼は掌中の球とも愛育した、然るにハリエツトの此兒に對する情は意外にも冷かであつたのである、彼女は殆んど自身顧る所なくして全く乳母の手のみ抱した、嗚呼、父は愛し母はその兒を冷遇した、されば兩者の間に感情の衝突を來すは勢ひ止を得ない次第である、此に於て曾て結婚の始に於ては愛を以て生活せ

んと迄言ひ合ふた間も、遂に不調和となつた。』

二、新なる戀は燃えぬ 戀は思案の外である

是よりしてシエリーの行爲は大にその妻をして心を痛めしめた。彼が奇言奇行は意外なる方面に向つてその親交を深め、彼は漸次交をポイン井レ夫人と、而してその女なるユルテリアとに結んだ、かくて又一方にはゴド井ンの家族と相往來し、交情日に密を加へて重り、ゴドインが先妻の連れ子なるファンニ、イムリーは早くも彼を思ひ初め、人知れず戀の炎を胸に燃やした、又翻つて彼の家庭を見れば、琴瑟既に其調を亂し、靄々たる和樂の春風は何時しか吹き去て、肅殺たる愛情の秋風は、冷かに兩者が間を吹き、姉エリサの一言一行はハリエツトが嫌惡の種となり家庭の不調和は茲に於て益其度を高めた。然も此時に當つてシエリーはゴドインの女メリーを戀ひ慕ふに至つた、嗚呼戀は思案の外である、子までなしたる妻を措て更に此少女に思を燃やそうとは、彼は實に多情漢か、多血兒か、其情の熱きと炎々たる熱火の如く小説的の戀

愛もこれには過ぎぬであらうと思はれた、彼がメリーに對する新情と、ハリエツトに對する舊情とは、その心をして麻のやうに亂らしめた、忍ぶれど何時しか色に出でにける戀の、包めども思の外に洩れて、その相貌、その舉動、その言葉迄、悉く心の中の苦悶を露はし、その眼は朱を注ぎ、その髪は亂れるも懶んじて來た、吁、進んでメリーと共に愛の手を握り合はんか、ハリエツトに對する舊情の良心に咎むるを奈何にしやう、退いて妻との舊情を温めやうか、メリーを思ふの情の心に燃えて胸を焦すを奈何しやう、左顧右望、千々に碎くる思は、戀の焰を燃やして新らしき戀に誘ふが如く、憐むべき妻と可愛の嬰兒とは、舊き戀を温めんとするが如くである、煩悶苦惱、自ら爲す所を知らざるに至つた彼は、遂に阿片丁幾の瓶を手にして「我は此瓶を離すこと能はず」と迄叫ばしめた、メリー此時芳紀方に二八、春若ふして花の蕾の如く、美しくしき容貌と、白く艶なる顔とは、斯の多情詩人を迷はしむるべき一種の魔力を有して居たのである。

妻子を置いて戀人と走る

戀の變遷、慘また慘

彼は一千八百十四年三月二十四日、ハリエットと再び結婚の式を擧げた。それは當時ハリエットは妊娠中であつた故に、更らに英吉利國法にて結婚し、その子を以て正當なる嗣子としやうとしたのであつた。此心を見たならば誰人も彼が、ハリエットを棄てようとも、思はぬであらう、彼は實にハリエットとは借老同穴を契ることを欲しなかつたのであつたものと見ゆる、されば彼はその六月遂に哀れなる姪める妻と幼な兒を置、何所へか出奔した、又ハリエットも彼が何地へ走つたかをば知らなかつた、されば彼女は父の下に身を寄せた、越えて七月初めシエレーは彼女の下に書を送り、且つその生活の費を給與した。彼はハリエットを棄ててより後一ヶ月余を経て、戀人メリーを携へて倫敦を走つた、彼は實に如何にしてメリーの愛を獲たかといふに、彼は或るセント、トハン

クラスの院内に於てメリーと相會ふた、そして彼は自身が嘗めた心の中の苦痛や、又世上の辛酸を述べて、苦し我身が御身の愛に依て助けらるゝ以上は、哀れなる境遇を脱して、浮世の波に勝ち、永くその名を竹帛に垂れることが出来るであらふといふことを告げた、此に於てメリーは彼が熱心に動かされ直ちにその愛の手を彼に與へて承認の意を示した、かくて彼は七月二十八日メリーを携へて路をドーヴァーに取り、海を横ぎつて佛國巴里に奔つた、而して暫くの後再び英國に歸り來つた、然も此時彼は男爵家の嫡男となり、一年二千磅の金を得る身とはなつた、されば彼はその幾干を分つてハリエットに送つた然れども彼女は決して此金を得やうとは望まなかつたであらふ、彼女が望めるものは方に他にあつたのである、されどその望は遂に達せられんて止んだ、而して彼が悲哀なる境遇にあるに當つて、シエレーと新らしき戀人との間には、一千八百十六年一月二十四日を以て長子ウヰリアムは生れた、吁、此時に於けるハリエットの心は如何に悲しくあつたらう乎、實に斯一大打撃こそ、彼

女をして憐れむべき、悲惨最後を遂げしむるに至らしめたのである。嗚呼、これ誰れの罪であるか。』

妻の自殺

悲惨その極に達す

夫が戀情の變遷を恨みし、妻のハリエットは、實に惨しき最後を遂げたのである。此年の九月シエレーは居をテームス河畔に定めんとして、バツスに來つた時に、端なくも「ハリエット自殺した」との凶報は俄然彼が耳朶を打つた。

噫、薄命なるハリエットは無情なる良人に見棄てられて後間もなく、次子チャース、ピツシエを生んだ、爾來戀の果敢なさと、夫の不情を恨んだハリエットは、遂に一千八百十六年十一月十一日、可憐の兩兒を残して自ら水に投じて死んだのである。

彼の自殺は種々なる原因があつたのであらふけれども、今此悲惨なる事實を

見たるシエレーは、たとひその戀人と共に現住して居るにもせよ、一度「金にして盡きたらん日は、愛を以て生活しやう」と逸言ひ合したる、妻のハリエットが自殺を聞ては、豈に轉た今昔の感に堪えざらうや、後年に至るも彼は實に此恐るべき記憶は到底打消し能はなかつたのである。夫人の未路此に至りて惨、又惨と言ふべきであらふ。

戀の一幅對

一、シエレーとバイロン

多情なる詩人が戀の常として何れも同じやうなる歴史を残す中に、彼とバイロン程相似よりなる戀の歴史を止めたものはあるまい、彼等はその家庭の不幸に於て相一致し、その失戀の悲劇に於て相一致し、その結婚の不好結果に於て相一致し、又社會の迫害を受けたるとに於て、結局共に不運の兒、悲觀の人なるに於て、共に相一致して、居つた、ましてや兩人とも等しく自然の天寵を受